

Man & Mobile Suit

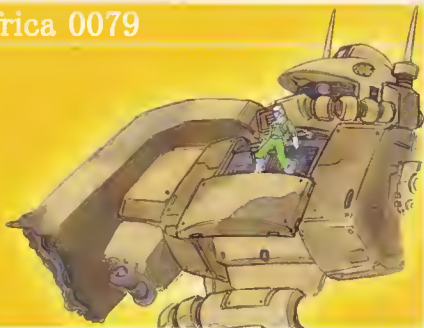


マン・アンド・モビルスーツ・シリーズ①

#01

ジオン独立戦争時のアフリカ戦線

The battle of Africa 0079



② MAGELLAN TOP

MS-06D
DESERT ZAKU

①

Man & MobileSuit

#01'

The battle of Africa 0079

CONTENTS

Chapter 1

04

The battle of Africa 0079

Appendices

14

The source of cover illustrations

Chapter 2

15

Weapon

Chapter 3

25

Illustrations

Chapter 4

29

Keyword

Appendices

41

Source list

Chapter 1

The battle of Africa 0079

Man & MobileSuit #01'

Chapter 1

アフリカ戦線史

■戦前のアフリカ

U. C. 0001年に宇宙移民が開始された当時、地球上には90億以上の人口が暮めき、人類は自らの重みによって窒息死しかねない状況であった。そのため、アジアと並び人口増加の著しかったアフリカ諸地域では、スペースコロニーへの移民が盛んに奨励された。しかし、スペースコロニーの居住権の獲得と入植には、莫大な経済的負担が強られるため、発展途上地域における移民促進活動は、困難を極めた。連邦政府は、U. C. 0016年にフロンティア開発移民移送局(註1)を設立し、この組織に多大な権限を与えることで、宇宙移民に関する諸問題の解決を試みた。しかし、当局のあまりに性急な移民政策は、事実上の強制移民ともいえる内容であり、後に、多くの禍根を残すこととなった。

前述したように多大な人口を抱えるアフリカ諸地域では、当然の事ながら、強制移民政策の嵐が吹き荒れた。統一政府とはいえ、連邦政府は、所詮は各国家の集合体でしかない。そのため、連邦政府の政策は、旧大国のエゴによって左右されるのが実状であり、移民政策も例外ではなかった。アフリカ大陸の中東部・タンザニア地区のキリマンジャロ山には、巨大な宇宙港が建設された(註2)。このキリマンジャロ宇宙港は、アフリカ諸地域の“過剰な”人口をスペースコロニーへ移民させるのに多大な貢献を果たすこととなった。

こうした移民政策が進められる一方で、アフリカ諸地域には、先進地域からの経済援助が盛んに行われた。しかし、こうした経済援助は、外部地域からの企業進出を少なからず伴うため、アフリカ諸地域の住民の中から、これを経済侵略と見なす声があがったのも事実である。長期に渡って武力闘争を続けた反連邦組織、通称FLN (Front de Liberation Nationale/ アフリカ民族解放戦線) が結成された背景には、経済侵略による貧困と移民促進の圧力に晒されたアフリカの苦悩があったことを忘れてはならない。

■ジオン公国軍のアフリカ進出

ジオン独立戦争の初期、公国軍はその持てる戦力の多くを割いて地球降下部隊を編成した。幾つかの戦略的価値を持つ都市と貴重な地下資源を持つアフリカ大陸は、公国軍にとって重要な目標のひとつであり、アフリカの地が戦乱に巻き込

註1: フロンティア開発移民移送局の発足より6年後、連邦政府は、地球上における地域紛争の消滅を宣言しているが、実際には、これ以降も強制移民に反対する民衆暴動は頻発した。なお、フロンティア開発移民移送局は、U. C. 0030年に民営化されている。

註2: 宇宙港の建設地として、キリマンジャロが選定された理由としては、この地が赤道に近く、地球の自転を利用する上で有利である点が挙げられる。

註3: 第2次降下作
する補充部隊として
部隊が紅海へ着水
規模な部隊でありな
軍部よりはるかに
北アフリカにおいて
も恐るべき敵となっ

■公国軍の降下部隊
A: ジブラルタル
B: トリポリ
C: アレキサンドリア
D: アデン
E: ナイロビ
F: キンシャサ
G: ダカール

a

b

c

地球上には90
 よって窒息死し
 並び人口増加の
 ロニーへの移民
 ニーの居住権の
 れるため、発展
 めめた。連邦政府
 局(EL)を設立し、
 移民に関する諸
 に性急な移民政
 り、後に、多く

リカ諸地域では、
 えた。統一政府
 までしかない。そ
 よって左右され
 った。アフリカ
 ジャロ山には、巨
 ジャロ宇宙港は、
 スコロニーへ移民
 。

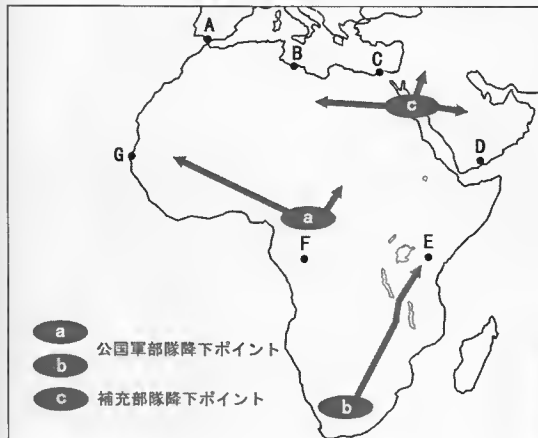
アフリカ諸地域に
 した。しかし、こ
 日を少なからず伴
 これを経済侵略と
 によって武力闘争
 le Liberation
 された背景には、
 されたアフリカの

る戦力の多くを
 略的価値を持つ
 は、公国軍にとっ
 戦乱に巻き込

注3 第2次降下作戦では主力を支援
 する補充部隊として、幾つかの外国人
 部隊が紅海へ着水している。彼らは小
 規模な部隊でありながら、一般の公国
 軍部隊よりはるかに戦意が高く、ことに
 北アフリカにおいては連邦軍にとって最
 も恐るべき敵となった。

■公国軍の降下ポイントと進軍ルート。

- A: ジブラルタル
- B: トリポリ
- C: アレキサンドリア
- D: アデン
- E: ナイロビ
- F: キンシャサ
- G: ダカール



まれることは避けられない情勢であった。

U.C.0079年2月、本格的な出兵に先立ち小規模な特殊部隊
 による先遣降下隊が出撃し、地球上での戦闘が開始された。
 その後、橋頭堡が確保された翌3月からは、派遣部隊の主力
 が三派に分かれて地球へ降り立ったが、アフリカ諸地域への
 部隊降下は18日の第3次降下作戦が最大規模であった。この
 第3次降下作戦の前後にも、支援部隊や別働隊がアフリカ侵
 入を果たしており、公国軍は、開戦から僅か3ヶ月で大軍を
 アフリカ大陸へ降ろすことに成功した(注3)。

当時、公国軍がとった進軍ルートは、中東からスエズを突
 破してアフリカ大陸へ侵入するルート、アフリカ大陸中西部
 へ降下しダカールを目指すルート、そして、同じくアフリカ
 大陸南端部へ降下し北上するルートの3つに大別される。ア
 フリカ大陸の南半分を短期間で制圧した公国軍は、主戦場と
 なった中東・北アフリカ地域で戦力を再び集結させ、いわゆ
 る「分進合撃」戦術で連邦軍を圧倒した。

とはいえ、公国軍の連携は必ずしも順調ではなかった。当
 時、アフリカ大陸に展開していた公国軍の指揮系統は複雑極
 まりなく、大規模の作戦行動において支障を来す場面も多
 かったと伝えられる。本来、地球降下作戦の主力はキシリア
 少将麾下の突撃機動軍であり、ガルマ大佐の指揮によって北



■MR75「ガンナー・ビーグル」。連邦軍が偵察・連絡用途に採用した1人〜数人乗りの小型ライトシステム。公国軍側の「ワッパ」に相当する機体である。大戦中の同軍は、しばしばこの種の小型機による自衛的な内海攻撃を決定した。戦後、小型ライトシステムは複数の企業によって民生化され、レジャー用途や日常の移動手段として幅広い層に普及したが、その際に「ワッパ」という固有名が、これらの機體全般に対する一般名称として定着するに至った。

註4 陸路による作戦を「トライデント」、それに呼応した海洋作戦を「ジャベリン」とする記述もあり、資料によって食い違いが見られるのも事実である。しかし海神ボセイデンの標章であり、時に制海権の象徴として用いられる「トライデント」の方が地中海における作戦名としては相応しく、もう一方の「ジャベリン」もどちらかといえば、シナイ半島の打進作戦に対する命名と考えた方が自然であろう。

米大陸を中心に展開した地球方面軍主力も、元々は、突撃機動軍第1機動歩兵師団を改変・増強したものであった。しかし、アフリカ大陸にはギレン総帥直属の親衛軍部隊が派遣された上、中東方面から進撃してきたドズル中將麾下の部隊が合流したため、公国軍のアフリカ軍団は、事実上、3軍の混成部隊にならざるを得なかった。ギレン総帥

が、手持ちの部隊をアフリカへ差し向けた背景には、オデッサ探掘基地の地下資源を独占したキシリア少将への対抗心が見え隠れするが、指揮系統の異なる部隊が混在するという重大な弱点は、公国軍を徐々に苦しめ、大戦末期には致命傷となっていくのであった。

■大戦前期のアフリカ戦線

U.C.0079年5月、既にトリポリを制圧下においていた公国軍アフリカ軍団は、「ジャベリン」作戦を発動、北アフリカ地域に踏みとどまっていた連邦軍第8軍と激突した。これは中東に展開した宇宙攻撃軍地球派遣部隊との合流を狙ったもので、この作戦を支援するため地中海方面では「トライデント」作戦が展開されていた(註4)。地中海周辺の連邦軍は1000機以上の戦闘機・攻撃機、約850両の戦車を有していたが、公国軍の士気は高く、60機余りのモビルスーツを先頭に激しい攻撃を加えた。連邦軍は、テルアビブ工廠で運用テストを行っていた装軌式モビルスーツまで投入し、必死の反撃を試みたものの、5月25日にはアレキサンドリアが陥落。さらに3日後には司令部の置かれていたエルサレムが公国軍の占領下におかれ、連邦軍の残存部隊は撤退、あるいは降伏した。一方、アフリカ大陸北西部に押し込められた連邦軍アフリカ方面軍は、戦車や砲を陣地に固定し頑強に抵抗。ダカールへの進路を塞ぐようにトリポリタニア地方に展開した連邦軍第62軍団を駆逐すべく、アフリカ軍団は執拗な攻撃を繰り返すものの、もとより戦力的に余裕が無いこともあり、こちらの戦線は完全に膠着してしまう。公国軍は中東方面の作戦を成功させた後、大陸北西部の連邦軍を一掃すべく戦力を再編、本格的な大攻勢、作戦名「アトラス」を発動する。大陸北岸に横たわる山脈の名をとった作戦名からも、連邦軍を北大西洋に追い落とそうという公国軍側の意気込みが伺えるが、この2次作戦は最終的に頓挫し、公国軍の攻勢は完全に失速する。

■(上)空挺作戦を支援する工廠製のRX-75「ジム」から先行量産型モビルスーツの投入は形勢の逆転したものの、公国軍は大きかった。
■(下)連邦地上軍人、「銀狼」のハルト「ジム・ライトアーマー」戦線へ転出する以上で7機以上の戦果を

に展開した地球
も、元々は、突撃
歩兵師団を改
たものであった。
の親衛軍部隊が
上、中東方面から
トズル中将麾下
したため、公国
カ軍団は、事実
成部隊にならざ
った。ギレン総帥
景には、オデッ
将への対抗心が
在するという重
大期には致命傷と

においていた公国
動、北アフリカ地
突した。これは中
合流を狙ったもの
「トライデント」
邦軍は1000機以
していたが、公国
を先頭に激しい攻
運用テストを行っ
死の反撃を試みた
陥落。さらに3日
公国軍の占領下
に降伏した。一方、
軍アフリカ方面軍
ダカールへの進路
連邦軍第62軍団
繰り返すものの、
こちらの戦線は完
作戦を成功させた
を再編、本格的な
大陸北岸に横たわ
を北大西洋に迫り
るが、この2次作
に失速する。

■(上)空爆作戦を敢行するテルアビブ
工廠製のRX-75「ガン・タンク」。これ
ら先行量産型モビルスーツの防衛戦へ
の投入は形勢の逆転には直結しなかつ
たものの、公国軍特兵へ与えた動機
は大きかった。
■(下)連邦地上軍のトップエースの1
人、「銀狐のハルトマン」のRGM-79A
「ジム・ライトアーマー」。彼はアフリカ
戦線へ転出する以前に、オデッサ方面
で7機以上の戦果を挙げている。



■公国軍占領下のアフリカ諸地域

初期作戦において一定の成果を収めた公国軍アフリカ軍団
にとって、支配地域の占領統治は重要課題であった。公国軍
は地中海沿岸の古都アレキサンドリアに潜水艦部隊を含む多
数の部隊を駐留させ、北アフリカ統治の中心地として整備し
た。またキリマンジャロ山麓の宇宙港を制圧し、ここを本国
との連絡路として確保。さらにエチオピア高原の中央部に巨
大な地下要塞を建設した。ゲド要塞と呼ばれたこの軍事施設
は、U.C. 0052年に偶然発見された天然の地下大空洞を利用し
たもので、公国軍のアフリカ防衛の要として期待されていた。

公国軍はこれらの拠点を通じて、アフリカ諸地域の占領統
治を行った。公国軍の進駐直後、現地人の間にはこれを歓迎
する風潮も根強かった。FLNに代表されるような現地の反

連邦勢力にとって、公国軍は「敵の敵」であり、彼
らにとって公国軍の攻勢は正に天恵であった。しか
し、実際には、公国軍と現地反連邦勢力の共同戦線
は早期に挫折してしまう。5月16日、大陸中西部の
ヌブリア村で住民全員が虐殺される事件が発生し、
連邦政府が、これを公国軍の仕業として大々的に発
表したのが原因である。この虐殺は連邦軍によって
仕組まれた謀略であり、民間報道機関の取材により
事件の全容が明らかになるまで、終戦後3年以上の
月日が必要とされた。元々、スペースノイドである
公国軍将兵と、アフリカ大陸で生まれ育った現地人
では価値観から生活習慣まで全く異なることもあり、
現地人の間には確実に反ジオン感情が植え付けられ
ていった。

■アフリカ軍団崩壊の兆し

開戦より5ヶ月ほどを経過すると、地球各地に侵
攻した公国軍の補給線は延びきり、前線の部隊は慢
性的な物資不足に悩まされるようになった。公国軍
アフリカ軍団も当初の勢いを失い、慣れない環境に
苦しむ将兵連の間には厭戦気分が広がりつつあった。
この時期、公国軍側の「アトラス」作戦が失敗に終
わったことにより、大陸北西部の戦線は固定された。
そのため手詰まりとなった両軍は、共に大規模な作
戦行動を抑えるようになり、アフリカ戦線の戦闘は
一時沈静化した。均衡していた両軍のバランスが崩
れたのは10月中旬、公国軍が中央アジア～ヨーロッ
パ方面における連邦軍の大規模反攻作戦を察知した
前後であった。アフリカ軍団はオデッサ防衛のため



■チュニジアにて確認されたザク・タンカーの1両。恐らくこの車両は、損耗した複数の部隊を統合して再編成された第104独立装甲旅団の所属であると思われる。ザク・タンカーは、ホバー推進機能を持たないモビルスーツの輸送に有用であったばかりか、移動基地としての役割も担っていた。

そしてアフリカ軍団の運命を決定づけたのが、11月7日から9日にかけて行われたオデッサ攻防戦である。連邦軍側の作戦目的はオデッサ採掘基地の奪回であったが、実際の戦闘は黒海沿岸の広い地域で行われ、その余波は北アフリカ地域にも及んだ。主戦場における第3軍（レビル大將指揮）の攻勢を支援すべく、増強された連邦軍アフリカ方面軍は支作戦を決行、スエズ地峡を目指し進撃を開始した。つまり、半年前の北アフリカ戦線の攻守が入れ替わったわけである。オデッサ作戦の開始を待たずしてトリポリが奪回されたのに続き、公国軍は、ベンガジ、カイロといった諸都市を相次いで失い、ユーラシア大陸とアフリカ大陸の部隊は分断の危機に直面した。こうした状況下で、アフリカ軍団は、バクーへの空輸作戦を決行するなどオデッサ方面の友軍をよく支え、基地陥落後は敗走してきた味方守備隊を大陸へ迎え入れるべく奮戦した。中でも、スエズ運河周辺の現地守備部隊は、モビルスーツを用いたゲリラ戦法による遅滞作戦を展開し、連邦軍を苦しめたことで特に有名である。

■アフリカ戦線の終焉

連邦軍はオデッサ作戦に際し、600万とも700万ともいわれる未曾有の大軍を動員した。オデッサ採掘基地を陥落させた後、これらの部隊は地球上の各地の反攻作戦に転用されていたが、アフリカ戦線へ多くの戦力が割かれたのは地理的な条件から考えても当然であろう。余勢を駆ってアフリカ大陸へ雪崩れ込んだ連邦軍に対し、公国軍も持てる限りの戦力を北アフリカ地域に結集、11月中旬より激しい戦闘が各地で発生した。

迎撃つ側の公国軍アフリカ軍団もオデッサ方面から撤退してきた部隊を吸収したことで、表面上の戦力はそれなりに向上していた。またこの時期、アフリカ軍団には本国やグラナダ、カリフォルニアの各工廠よりMS-07系、MS-09系といっ

少なからぬ部隊を引き抜かれ、さらに大陸北西部で連邦軍の逆攻勢を受けたことも重なり、その戦力を大きく失うことになった。この連邦軍の逆攻勢は「パトリオット」作戦と呼ばれ、戦線の右翼、サハラ砂漠西部に展開していた部隊が一気に南下、その後、ギニア湾沿いに東進して大陸中央部の奪回を狙ったものであり、最終的には挫折したとはいえ、後の戦局に多大な影響を与えることになる。

■砂漠を疾走するMS-07系からの改修機で、MS-07の改装は、先行量産機上から抽出された3台の予定であったが、カリフォルニア工廠を遠ざけたため、実験機に留まった。このアフリカ戦線に送られ滞り続けたのは、1台だけ。



を引き抜かれ、さ
連邦軍の逆攻勢
なり、その戦力
になった。この
は「パトリオッ
戦線の右翼、サ
展開していた部隊
の後、ギニア湾
大陸中央部の奪回
あり、最終的には
え、後の戦局に多
ることになる。

が、11月7日か
る。連邦軍側の
が、実際の戦闘
は北アフリカ地域
大將指揮)の攻
方方面軍は支作戦
た。つまり、半年
わけである。オ
奪回されたのに統
都都市を相次いで
は分断の危機に
団は、バクーへの
軍をよく支え、基
へ迎え入れるべく
予備部隊は、モビ
戦を展開し、連邦

も700万ともいわ
据拠を陥落させ
作戦に転用されて
られたのは地理的
駆ってアフリカ大
軍も持てる限りの
力激しい戦闘が各

アフリカ方面から撤退
戦力はそれなりに
団には本国やグラ
系、MS-09系といっ

た新鋭モビルスーツが多数送られていた。これは、本来オ
デッサに送られるはずだった地上用機材が行き場を失ったた
めでもあるが、アフリカ戦線向けに開発された局地戦用機な
ども含まれており、補給の途絶えがちな地球上の部隊として
は、比較的装備に恵まれていたといえる。公国軍がこれらの
戦力を用いてヨーロッパ方面へ再侵攻する可能性も浮上し、
連邦軍はこれを重大な脅威と認識していた。

11月18日、連邦軍は「ベルベット」作戦を開始。この作
戦により、連邦軍は2、8日までに北アフリカ各地の地中海岸
から紅海岸にかけての広大な地域を解放、アフリカ大陸の公
国軍はついに孤立化した。公国軍は、ロンメル中佐麾下の
「青」、クランベリー大佐麾下の「鉄の蠍」の両精鋭部隊を中
核に反撃を試みたが、26日の戦闘で大敗、挽回は絶望的と
なった。同時期に、北西部戦線においても連邦軍は着実に支
配領域を広げており、公国軍は大陸北岸の全域より後退した。

沿岸部の安全が確保されたことで、連邦軍は、増援部隊の
揚陸に踏み切った。地中海沿岸のカイロ、ベンガジ、トリポリ
の3都市に合計23個師団が海路より到着、目前に迫った内
陸部侵攻作戦「サンダーボルト」に備えた。12月5日、先発
隊の4個師団が、停戦ラインを越え内陸部に侵入。公国軍は
これに先立つ11月30日に地球侵攻部隊撤退の方針を正式発
表しており、在アフリカの諸部隊にも12月7日に総引き揚げ
の命令が下された。大陸北東部のゲド要塞が完成していれば、
残存戦力を持って連邦軍の大部隊を釘付けにし、あるいは、
宇宙における戦局に影響を与えることも可能であったかもしれ
ない。しかしゲド要塞は、大戦中期の段階で既に放棄されて
おり、アフリカ防衛に寄与することは出来なかった。公国
軍の本国への脱出口となったのはキリマンジャロ宇宙港で
あったが、実際にはアラビア半島南端のアデン宇宙港へ向か
うよう命令された部隊も多く、引き揚げ命令が下されてから

5日で残存部隊の過半数が
アデン経由で宇宙へ向かっ
た。

公国軍がアフリカ防衛を
断念したことにより、連邦
軍の「サンダーボルト」作
戦は順調に進んだ。ジャミ
トフ准将指揮する連邦軍は
大陸中央部の逃げ遅れた公
国軍部隊を両翼より包囲す
る形で進撃し、12日の時点
で公国軍をエチオピア、ソ
マリア、ケニア、タンザニ

■砂漠を疾走するMS-09D。既存のB
型からの改修機であろう。D型仕様へ
の改装は、先行量産型やB型のライン
上から抽出された30機を対象に行わ
れる予定であったが、作業を担当した
カリフォルニア工廠が連邦軍によって奪
還されたため、実際に完成したのは20
機に留まった。この内、計画通りにア
フリカ戦線に送られた、部隊配備にま
で着けたのは、僅か10機余りに過
ぎない。





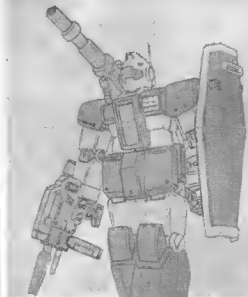
■鉄屑と化した公国軍のサムソン型トレーラー。終戦開戦の撤退行において、足の遅い大型輸送車両は、連邦軍対地攻撃機の好餌であった。

アの4地区へ閉じこめた。青ナイル川とバハル・アルジェベル川に挟まれた地域に絶対防衛ラインを定め、ウェレル山に前線基地を設けた連邦軍は、一時進撃を中断するが、これは後続部隊を待つ最後の掃討作戦に備えるためのものであり、アフリカ軍団の運命に変わりはなかった。

かくして万全の準備を整えた連邦軍は、12月15日に進撃を再開。地中海沿岸、あるいは大陸北西部から進撃してきた部隊とは別に、インド洋沿岸からも7つの輸送艦隊から合計14個師団が揚陸され、エチオピアなど4地区に残る公国軍部隊に対する掃討作戦が開始された。その僅か48時間後、掃討作戦は完了、公国軍の組織的抵抗は17日に終結した。公国軍側の残留部隊は抗戦して壊滅するか、投降するか、あるいは正規戦を断念して潜伏するかを選択を迫られたのである。

■アフリカ軍団の末路

■前線へ向かうRGC-80「ジム・キャノン」。ボウワ社のBR-S-85系のビーム・ライフルを携行していることから、戦後の掃討作戦における撮影ではないかという説もある。



連邦軍のアフリカ奪回作戦に際し、公国軍上層部は在アフリカの諸部隊に対して、かなり早い段階で撤退命令を下している。当時、ギレン総帥を中心とする軍上層部は、ソーラ・レイによる漸減作戦の後、本国を目指して進撃してきた連邦

宇宙軍残存艦隊をア・バオア・クーで殲滅、連邦軍の経戦能力を奪って講和に持ち込むという戦略を立てていた。この戦略の中では、宇宙攻撃軍本拠ソロモンを含むあらゆる公国軍側拠点は捨て石に過ぎず、まして長期消耗戦を前提としてアフリカ大陸のレアメタル鉱山群を死守する必要などなかったといえる。公国軍にとって重要なのは、アフリカ戦線で貴重な実戦経験を積んだ歴戦の将兵であり、彼らを最終決戦地である宇宙まで呼び戻すことが目下の最優先課題であった。

しかし軍上層部の撤退命令に反し、アフリカ残留を決意した部隊も存在した。「おめおめと宇宙へ逃げ出せとかいうのか！ 行きたいものは行くがいい。」とはロンメル中佐の有名な言

■(上) 公国軍は、人を徴募し、偽装通して利用した。中には未成年者や女性彼らは、公国軍に協を受けていたが、戦切り捨てられていった
■(下) 旧世紀の工業たMS-09D。数えなかった先行量産型であり、しかも、ほぼ無いが珍しい。背面のヒールの携行武装は欠け左肩前面装甲に描かれた興味深い。



バル・アルジェベ
め、ウェレル山に
断するが、これは
ためのものであり、

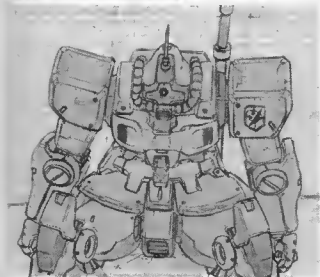
12月15日に進撃
から進撃してきた
輸送艦隊から合計
に区に残る公国軍部
隊は48時間後、掃討
に終結した。公国軍
隊はるか、あるいは
られたのである。

軍上層部は在アフ
撤退命令を下して
上層部は、ソーラ
進撃してきた連邦
ア・クーで殲滅、連
和に持ち込むとい
う戦略の中では、宇
むあらゆる公国軍
まで長期消耗戦
のレアメタル鉱山
だったといえる。公
アフリカ戦線が貴
族の将兵であり、彼
まで呼び戻すこと
だった。

命令に反し、アフリ
存在した。「おめめ
わ！ 行きたいもの
ル中佐の有名な言

■(上) 公国軍は、地理に詳しい現地
人を徴募し、偽装連隊員や道案内役と
して利用した。中には、下の少女のよ
うな未成年者や女性も少なくなかった。
彼らは、公国軍に協力することで報酬
を受けていたが、戦況の変化に伴い、
切り捨てられていた。

■(下) 旧世紀の工業団地跡に遺棄され
たMS-09D。数える程しか配備されな
かった先行量産型ベースの機体であり、
しかも、ほぼ無傷の状態であるの
が珍しい。背面のヒート・サーベル以
外の携行武装は欠落しているようだ。
左肩前面装甲に描かれたマーキングも
興味深い。



である。また連邦軍の急進撃によってキリマンジャロ、ある
いはアデンへの撤退路を塞がれ、やむなく地上に残った部隊
も少なくない。これらの公国軍アフリカ残留部隊は、要塞化
した鉱山などに籠もり、あるいはPLNなど現地の反連邦勢力
と結び土着化することで、連邦軍の追撃から逃れた。

U.C.0080年1月1日、グラナダ条約が結ばれたことで、地
球圏全域の連邦軍、公国軍に対し停戦命令が発せられた。し
かし、地球上の各地において激戦を繰り広げている両軍部隊
に停戦命令が達するまで数日のタイムラグが生じた上、前線
においてこれが遵守されるには、さらなる時間が必要であっ
た。公国軍部隊の中には、共和国臨時政府が締結した終戦協
定は無効であり、正義の独立戦争は今後も続く主張する経
戦論が根強く、また、連邦軍側においても、正式な命令に拠
らない「残党狩り」がしばしば実行された。連邦軍が、アフ
リカ大陸の旧公国軍を武装解除したと発表したのは、終戦か
ら5ヶ月後のことであり、実際には、それ以降も旧公国軍残
党によるゲリラ戦は続けられた。

■両降参の戦略・戦術の今日の評価

アフリカ奪回作戦を通じて、連邦軍が投入した戦力はモビ
ルスーツ940機、戦闘車両880両、航空機4200機、火炮・ミ
サイルなど3万100基に達し、これは当時の連邦地上軍の約
2割に相当した。この中で特に目を引くのが、1000機近くが
投入されたモビルスーツであり、1ヶ月余り前のオデッサ戦で
は僅か数十機の参加であったことを考え合わせれば、驚異的
な大量投入といえるだろう。これら連邦軍モビルスーツの大
軍の前には、精強を誇った公国軍アフリカ軍団といえども正
面からの決戦は不可能であった。これに対し公国軍側では、
彼我の戦力差が拡大する前に敵先鋒部隊を北アフリカで迎え撃

つべしという主戦論が、決戦を避けるこ
とで敵戦力を主戦場（最終防衛ライン
＝ア・バオア・クー）からできるだけ引き
離そうという避戦論を押し切り、結果と
して11月26日の大敗を招いた。無論、
この前後の激戦において公国軍側も連
邦軍に相当の出血を強いているのだ
が、増援部隊を満載した輸送艦が地中
海とインド洋に葬り込んでいる連邦軍に
とって、この程度の損害は許容範囲内
であった。前述したとおり、在アフリカ
の公国軍諸部隊は指揮系統の統一が
不十分であった。元々のアフリカ軍
団がギレン総帥の指揮ラインに属し

註5.終戦直後のU.C.0080年1月、公国軍オーストラリア駐留軍司令のウォルター大佐は「月の階段 (Staircase to the Moon)」作戦を発動、大規模な陽動を行い連邦軍を引き付ける一方で、オーストラリア大陸北西部の港町ブルームに残余の部隊を集結させ、温存していた輸送船団との接触を試みた。奇襲によって一時的に連邦空軍部隊を麻痺させたことが功を奏し、公国軍輸送船団は脱出に成功、アフリカ大陸へ到達している。

ていたのに対し、共同して作戦に当たるべき中東方面の部隊は宇宙攻撃軍所属であり、さらにオデッサ陥落以降には突撃機動軍マ大佐麾下の探拠基地守備隊が多数合流した。そのため大戦末期のアフリカ軍団は、見かけの戦力こそ向上したものの、練度も装備もバラバラの部隊の寄せ集めに成り果てていたというのが実態であり、北米大陸やオーストラリア大陸の戦局悪化に伴い、各地の敗残部隊が空路や海路を伝ってアフリカ大陸へ逃げ込むに至っては、統一された作戦行動はほぼ不可能となっていた(註6)。オデッサ戦後の一時期、連邦軍上層部は戦力を増したアフリカ大陸の公国軍が北上し、ヨーロッパを窺う危険性を真剣に論じたが、後世の視点から考えれば、これは杞憂であったといえる。

とはいえ、アフリカ軍団の一部には、装備に恵まれ士気も高い強力な部隊が存在したこともまた事実である。こうした精強部隊が、地勢を利用し、現地反連邦勢力と連携したゲリラ戦術をとった場合、これを排除することは簡単ではなかった。ヌブリア村事件による現地人との乖離、スペースコロニーとあまりに異なるアフリカの環境などといった多くの障害のため、公国軍と現地反連邦勢力の関係は、必ずしも良好ではなかったが、地元共同体に受け入れられアフリカへ残留した公国軍将兵も少なくなく、戦後の反連邦闘争を通じて、元公国軍将兵は次第に現地へ溶け込んでいった。そして8年後、ハマーン軍のアフリカ派兵に際しては、FLNの実戦部隊がこれに呼応して武装蜂起するまでに、両者の関係は改善されるに至ったのである。公国軍側が当初より現地反連邦勢力の取り込みを力を入れていれば、あるいは連邦軍側の謀略工作が成功していなければ、アフリカ戦線の結果は、全く違ったものになっていただろう。

勝利者たる連邦軍側の視点からアフリカ戦線を振り返った場合、その勝因とは何であろうか。まず、忘れてはならないのが、連邦軍にとって初めてモビルスーツを大量投入した作戦が、このアフリカ奪回作戦であったということであろう。この作戦は目前に迫った「星一号」作戦、「チェンパロ」作戦

■大戦末期のアフリカ
A: トリポリ
B: ベンガジ
C: アレキサンドリア
D: カイロ
E: 連邦軍ウエレル山
F: 公国軍ゲド要塞
G: 公国軍第18補給
H: キンバーライト
I: キンシャサ
J: アデン宇宙港

■大陸東部公国軍軍
R1: ハリー
R2: ディック
R3: トム

■RMV-1「ガン・タンクⅡ」。本車は実戦で使用された両数が少ない割に、豊富な兵装ヴァリエーションを持つ。左の車両は、左腕ユニットを4連装ミサイル・ガンに換装している。



→ 連邦軍
→ 公国軍

へき中東方面の部隊
が陥落以降には突撃
隊を合流した。そのた
め威力こそ向上したも
のにもかかわらず、こ
うして集めに成り果てて
オーストラリア大陸
の陸路や海路を伝ってア
フリカ大陸に侵入した
作戦行動は、ほ
うの一時期、連邦軍
が北上し、ヨー
ロピアンの視点から考

えられた。こうした
状況に恵まれ士気も
高揚した。こうして
勢力と連携したグリ
ンは、必ずしも良好
な関係を築き、アフリ
カ大陸に残留
連邦軍と通じて、
いった。そして8年
は、FLNの実戦部隊
両者の関係は改善さ
れ、現地の反連邦勢力
は連邦軍側の謀略工
作の結果は、全く違

った。アフリカ戦線
を振り返った
。忘れてはならない
は、大量投入した作
戦行動である。
「チェンバロ」作戦

■大戦末期のアフリカ戦線

- A: トリポリ
- B: ベンガジ
- C: アレキサンドリア
- D: カイロ
- E: 連邦軍ウェル山基地
- F: 公国軍ガド要塞
- G: 公国軍第18補給基地
- H: キンバーライト鉱山基地
- I: キンシャサ
- J: アデン宇宙港

■大陸東部公国軍撤退ルート

- R1: ハリー
- R2: ディック
- R3: トム

の予行練習を兼ねたものであり、アフリカ戦線における勝利は連邦軍にとって大きな自信となった。航空機、戦車、戦艦といった在来兵器にモビルスーツの支援という新たな任務を与え、地上戦の新たなスタイルを築き上げたジャミトフ准将の手腕は高く評価されるべきであろう。一方、連邦軍と公国軍の双方が、大量のモビルスーツをアフリカ大陸へ持ち込んだことは、戦後の武器拡散という新たな問題を生じさせた。余剰となった大量のモビルスーツは、様々な不穏分子や武器商人の手に流れ、戦前より熾っていた地域紛争を激化させることとなった。連邦軍は、戦中、モビルスーツの集団運用の威力を実証したが、戦後は図らずも、モビルスーツのゲリラ戦兵器としての利用価値を広く知らしめる役割を担わされたのである。



Appendices

イラスト解説

表紙イラスト解説

1 「ロイ・グリーンウッド少佐とMS-06D」

擺座した愛機に見切りを付け、自動小銃を片手に戦場に降り立つロイ・グリーンウッド少佐の勇姿。この勇敢なムーア人指揮官は、長らく愛機としてきたMS-06Dに替わり、最新鋭のMS-09Dを受領するが、終戦間際には乗機を再度、MS-06Dへと戻している。

2 「北アフリカ戦線のマゼラ・トップ」

シャークマウスを描いたマゼラ・トップ。その主砲の砲身には、3本のキル・マークが誇らしげに記されている。航空機が慢性的に不足している公国軍において、マゼラ・トップはその劣悪な飛行性能にも関わらず、対地攻撃機の代役として使用された。そのため、大戦中期以降には、主翼面積の増大など幾つかの性能改善策が実施に移されている。

塗装図解説 RGC-80 カラー・ヴァリエーション

1 ジャブロー工廠出荷時の正式塗装。ホワイト/レッドの2色塗装だが、腰部装甲をブラックで塗りつぶしている点が、他の連邦軍モビルスーツと異なる。アフリカ戦線へ送られた機体群も、当初はこの状態のまま実戦に投入された。

2 現地部隊による有名な塗装例。サンディブラウンとダークアースの塗料を上塗りして、砂漠地帯における被発見率を低減している。機体そのものには特別な改修は施されていないようだが、主砲の砲口が一般的な仕様と異なる。

3 北アフリカ戦線の第307 スコードロン (Squadron/ 騎兵大隊・飛行中隊・戦隊) D 小隊所属機。北米戦線で見られるようなグレー系の塗装の上から、ブラウン系の蛇行迷彩、濃いグレーとホワイトの斑点迷彩を施している。主砲にグリップが追加されている点と合わせて興味深い機体である。

を片手に戦場に降
この勇敢なムーア人
に替わり、最新鋭の
と再度、MS-06Dへと

ブ。その主砲の砲身
記されている。航空
て、マゼラ・トップ
を攻撃機の代役とし
こは、主翼面積の増
れている。

リレーション

ワイト/レッドの2
つぶしている点が、
リカ戦線へ送られた
投入された。

ディブラウンとダー
における被発見率を
改修は施されていな
と異なる。

(Squadron/騎兵大
戦線で見られるよ
系の蛇行迷彩、濃い
る。主砲にグリップ
機体である。

Chapter 2

Weapons

Man & MobileSuit #01'

Chapter 2

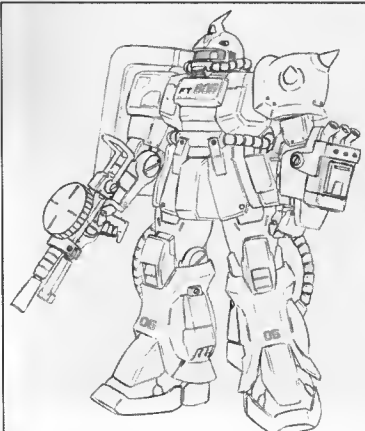
アフリカ戦線の主要兵器

ジオン公国軍

■ジオニック MS-06 「ザクII」

アフリカ戦線に投入されたザクは、J型とD型が主体である。極初期にはF型も使用されたが、これらの機体は戦闘による損傷や定期点検などによって後方に送られた際、あるいは改修キットによって現地で、J型と同仕様に改造されている。初期アフリカ軍団の主力機はグラナダ工廠製のJ型であり、その汎用性からあらゆる局面で活躍したが、この時点では“機動力と生残性に優れた対戦車兵器”として運用される場面が目立った。その派手な戦果の陰に隠れて見落とされがちであるが、地球降下作戦に投入されたJ型の数はさほど多くなく、よほど大規模な作戦でもない限り、一度に投入できるのは精々数十機というレベルであつたらしい。そのためアフリカ戦線、特に砂漠地帯においてはJ型の稼働率が問題視され、局地戦向けのタフな機体に対する要望が軍当局に強く寄せられることになった。そこで、カリフォルニア工廠で設

■「ピンク・パンサー」所属のMS-06D「デザート・ザク」「白の805」、シングルアンテナ仕様であり、恐らく初期型の機体であろう。同部隊の“白の803”は右腕側面シールドに「キラビー」のマーキングを書き入れているが、「キラビー」隊との関係は不明である。“白の803”のパイロットが後に「キラビー」隊へ転属したのであろうか？



計されたのがD型、通称デザート・ザクであり、シングルアンテナ仕様71機、ダブルアンテナ仕様43機の合計114機が生産された。これらのカリフォルニア工廠製のD型は全てアフリカへ送られたというのが定説だが、この他に在来機からの改修機も存在したらしく、他戦線におけるD型類似機の運用記録も散見される。また、これと同様のケースとして挙げられるのが、アフリカ戦線で運用された多数のK型類似機存在である。MS-06K「ザク・キャノン」は、カリフォルニア基地で9機が試作され、その全てが北米戦線に送られているが、アジアやアフリカなどでも長砲身の両用砲を背負ったザクが確認されている。

註6:この2号機はD型として改修された。地部隊へ送られた。

註7:この機初期型だが、MS-09Aに近い。このタイプが、この中間形態である。

註8:この数字には、H型も含まれる。

とD型が主体であ
らの機体は戦闘に
られた際、あるい
様に改造されてい
工寮製のJ型であ
たが、この時点で
として運用される
れて見落とされが
型の数はさほど多
、一度に投入でき
しい。そのためA
型の稼働率が問題視
望が軍当局に強く
フォルニア工廠で設
けられたD型、通称デザ
ーあり、シングルア
ーム機、ダブルアン
3機の合計114機が
た。これらのカリ
フォルニア工廠製のD型は全
てへ送られたとい
うが、この他に在来
機も存在したら
線におけるD型類似
機も散見される。
とと同様のケースと
れるのが、アフリ
カに運用された多数のK
型が存在する。MS-
09「キャノン」は、カ
リフォルニア基地で9機が試
験の全てが北米戦線
に送られているが、アジアや
他地域でも長砲身の両
腕を持ったザクが確認さ

註6: この2号機はD型仕様のテストベ
ッドとして改裝された後、北アフリカの現
地部隊へ送られた。

註7: この極初期型の型式番号は不明
だが、MS-09Aであった可能性が高
い。このタイプが、YMS-09とMS-09B
の中間形態であることから推察であ
る。

註8: この数字にはG型の向上型であ
るH型も含まれる。

これらもD型同様、新規製作機以外の機体と考えられる。ア
フリカ戦線におけるザク・キャノン・タイプは中距離支援用
として、あるいは戦間爆撃機対策の野戦防空システムとして、
かなりまとまった数が運用されている。

この他、大戦末期には向上型であるF2型、FZ型が補充用
として送られているが、MS-07系、MS-09系の登場によって、
その数は極めて少ないものとなっている。

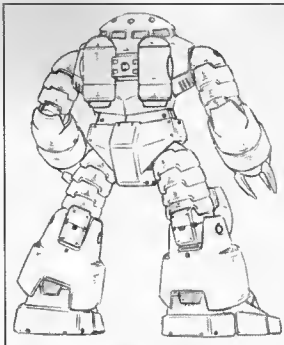
■ツィマッドMS-09 「ドム」

地球上におけるドムは、その限られた配備数にも関わらず、
連邦軍に対して非常に強烈な印象を与えている。アフリカ戦
線においてはB型、D型、F型、G型、H型の各型が実戦投入
されたほか、原型機であるYMS-09の2号機(註6)と、それに続
いて生産された極初期型(註7)も運用が確認されている。MS-
09系への転換が遅々として進まなかった北米戦線、オース
トラリア戦線に比べ、アフリカ軍団へのドムの配備は比較的ス
ムーズであったが、それでも絶対的な機数の不足は覆うべく
もなく、多くの前線部隊がドムを受領することなく終戦を迎
えている。

アフリカ戦線で運用されたドムの各型の内、特に評価が高
かったのがF型とG型である。F型は最多生産型であるB型の
複合エンジンを、より強力な熱核ジェットエンジンに換装し
たタイプで、外観こそB型とさほど変わらないものの、陸戦
機としてほぼ完成の域に達した名機である。このF型を熱帯
戦向けに特化させた機体が、いわゆるドム・トローベンと呼
ばれるF/Trop型であり、カリフォルニア工廠で設計されたモ
ビルスーツとしては最後期のものといえる。そして、G型は、
従来型の置き所であったジェネレータをMS-14「ゲルググ」と
同出力のものへ交換した他、大型の外装式プロペラント・タ
ンクの設置など、機体各部に思い切った設計変更を加えた最
終生産型で、地球上で運用する限り、ジオニック社のMS-14
「ゲルググ」や連邦軍のRX-78「ガンダム」と比較しても遜色
ない機体であった。しかし、カリフォルニア基地の失陥とグ
ラナダ工廠のMS-09系ラインのR型への順次転換により、G型
の生産は縮小され、最終的に完成したのは僅か88機(註8)に留
まっている。

■ジオニックMS-14 「ゲルググ」

終戦間際のアフリカ大陸には、宇宙へ続々と脱出する友軍
部隊とすれ違うように、数機のゲルググが補充用として送ら
れている。実戦配備直後の貴重な機体が、放棄された戦線
であるアフリカへ送られたのは、友軍の撤退支援のためとい
よりも、砂漠、熱帯など特殊な環境化における運用データを



■MSM-07「ズゴック」。MSMシリーズの胴体部装甲は基本的に厚く、メガ粒子砲以外の大抵の連邦軍側火砲は深層な脅威とならなかった。

収集するためであったらしい。これらのゲルググは基本的に全て標準仕様のA型であったが、MS-09系で養われた局地戦仕様機のゲルググ版であるD型も、少数が現地に届けられたようだ。これらのゲルググはアフリカに到着して間もなく終戦を迎えたため、大戦中の戦績は皆無に等しいが、戦後に数機が民族ゲリラの手に渡り、反連邦闘争や各地の地域紛争で使用されている。

■MIP MSM-07 「ズゴック」

大手機動兵器メーカーであるエム・イー・ペー社が生み出したほぼ唯一の実用モビルスーツ。水陸両用機でありながら、陸上においても素晴らしい戦闘力を発揮したため、上陸作戦用として多数の公国軍潜水艦に搭載された。本機の特徴は、機体の冷却システムに液冷/空冷の併用方式を採用したことで、これによって陸上における稼働時間の延長と運動性能の大幅な向上が実現された。アフリカ戦線では、潜水艦隊のほか陸上部隊でも運用され、内陸部の河川・湖沼地帯で活躍を見せている。大戦後期に連邦軍側がモビルスーツを大量に投入した後も、頑丈な耐圧殻と遊歩傾斜に優れた装甲形状によって、意外な生還率の高さを記録したという。

地球連邦軍

■RX-75 「ガン・タンク」

アフリカ・中東方面におけるガン・タンクの運用記録としては、U.C. 0079年5月のアレキサンドリア西方における空挺作戦が挙げられる。この作戦は連邦軍モビルスーツの実戦参加記録としては、最も古いもののひとつである。当時、破竹の進撃を続けていた公国軍アフリカ軍団が要衝アレキサンドリアに迫ったため、連邦軍はテルアビブ工廠で製造中の先行量産型を戦力化することを決定。急速、完成した数両に実戦装備を施して、最前線へ空輸することとなったのである。バラシュートで敵前降下を果たしたガン・タンクは、敵前衛の戦車中隊と交戦。この時の戦闘では、後方のザク部隊との交戦は実現しなかったが、ガン・タンクは火力と射撃統制装置の優位を活かし、多数のマゼラ・アタック戦車を炎上させている。最終的に、テルアビブ工廠製の先行量産型は12両が実戦に投入され、連邦軍側に多くの戦訓を残した。

後にRX-75シリーズの「先返り」として再設計された戦

註9：大戦中に連邦軍、陸軍と海軍をそ
空宇宙軍と地上軍に
かし公国軍との戦
は、陸海空軍の4軍
上存続し、本格的な
ち越された。

■RGM-79C「ジム・
タム」*レッドスター
連装ビーム・ライフ
が、これはFA-78-1
ド・ビームガンと同
う。



しい。これらのゲ
標準仕様のA型で
われた局地戦仕様
型も、少数が現地
のゲルググは
なく終戦を迎えた
無に等しいが、戦
手に渡り、反連邦
で使用されている。

「スゴック」

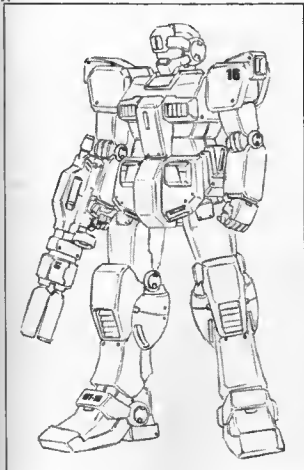
カーであるエム・
たほぼ唯一の実用
母機でありながら、
い戦闘力を発揮し
て多数の公国軍層
の特徵は、機体の
採用したことで、こ
運動性能の大幅な
水艦隊のほか陸上
主將で活躍を見て
を大量に投入した
装甲形状によって、

の運用記録とし
西方における空挺
ブルスーツの実戦参
である。当時、破竹
要衝アレキサンド
に戦って製造中の先行
完成した数両に実戦
なったのである。パ
ンクは、敵前衛の
方のザク部隊との交
火力と射撃統制装置
を戦車を炎上させて
生産型は12両が実
現した。

て再設計された戦

注9：大戦中に連邦軍は宇宙軍と空
軍、陸軍と地上軍に再編している。し
かし公国軍との戦闘が続いている間
は、陸海空軍の4軍の独立性は事実
上存続し、本格的な再編は戦後へと持
ち越された。

■ RGM-79C「ジム・スナイパー・カス
タム」
「レッドスター・インメルマン」
連装ビーム・ライフルを携行してい
るが、これはFA-78-1に採用されたハン
ド・ビームガンと同系統のものであ
る。



闘車両、RMVファミリーも数両がアフリカへ送られている。現
在判明している限りでは、RMV-1「ガン・タンクII」、RMV-3
「ガン・タンクIII」の2車種が「サンダーボルト」作戦に投入
されたい。これらの車両は、運用側の無能によって単独
偵察など明らかに不向きな任務に回された例もあったが、最
終的には長距離支援機としての地位を確立したらしく、戦後
の残党狩りではモビルスーツ小隊の後衛のポジションを与え
られている。

■ RX-77 「ガン・キャノン」

RX-77 シリーズは、様々な型が数機単位で各戦線に分散配
備されたため、その運用の実態を掴むのは非常に困難である。
ガン・キャノンに関する記録を丹念に調べていくと、アフリ
カ戦線に配備されたのは、RX-77-3の形式番号で分類される
兵装研究機と、いわゆる量産検討機であるD型が主であった
といえる。RX-77-3は簡単にいえばRX-77-2の武装強化案であ
り、両肩の主砲斉射時に発生する諸問題を解決すべく、幾つ
かの応急処置的な改設計を行ったタイプである。アフリカ戦
線では、エチオピア地区のウェレル山前線基地へ配備された

他、ゲド要塞を包囲した先発隊が使用
していたという証言もある。本型は、
主砲のメガ粒子砲への換装も検討され
ていたといい、実際にメガ粒子砲装備
型が製造されたという説もあるが、ア
フリカで確認されたのは従来型である。
なお、前線ではRX-77-3をガン・キャ
ノンIIIと呼称していたらしいが、この
名称は後のRX-77-4に与えられている
ため、正式なものではないのだろう。
もう一方のD型は、機体各部の設計が
大量生産に適するように簡略化されて
いるのが特徴で、従来のものより肉身
の短い新型主砲など、外観上の相違点
も多い。若干数が生産されたD型は、宇
宙軍と地上軍（註9）の双方に採用され、
宇宙軍強襲揚陸艦「グレイファントム」
所属のスカールレット隊、オーストラ
リア戦線の特務部隊「ホワイト・ディン
ゴ」などに配備されている。アフリカ
戦線へ何機が送られたかは不明だが、
別戦線で確認された機体数と総生産数
の兼ね合いから、さほど多くはないと
考えられる。

これ以外のファミリー機としてRGM-79シリーズとの部品共有化を進めコスト軽減を図ったRGC-80「ジム・キャノン」が挙げられる。ジム・キャノンは58機生産された内の19機がアフリカ戦線に割り当てられ、「サンダーボルト」作戦に参加している。これらの機体は、主に専門の支援部隊に配備され前述したRX-77Dと混成部隊を編成する場合もあったという。

■ RGM-79 「ジム」

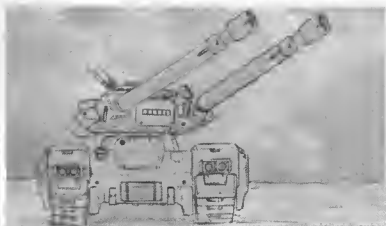
連邦軍が「ベルベット」「サンダーボルト」の両作戦に投入した940機のモビルスーツは、その大半がRGM-79シリーズであった。基本的にこれらのジムはジャブロー工廠で開発生産されたタイプで、アフリカにおける戦況が一段落すると後方に戻され、増援として宇宙軍へ送られた。一方、掃討作戦の末期にはルナツー工廠が中心となって設計したG型系列の機体がテストを兼ねてアフリカへ降ろされている。G型系列は胸部装甲の形状とモノアイ式とした新型頭部が特徴で、後に「星一号」作戦で活躍した生産型には、アフリカ戦線で得られたデータがフィードバックされた。この他にA型やC型、SP型(注10)などといった派生型も運用されているが、これらはアフリカ戦線でのみ確認されたヴァリエーションである。

注10：F型系列の局地戦用機、RGM-79SP「デザート・ジム」を示す。同じ接尾記号を与えられた「ジム・スナイパー・カスタムⅡ」とは別機である。

■ M74/74式巡航戦車

連邦軍の大型装軌式戦車で、世界的にはRTX-44以前のものと思われる。U.C.0070年代の連邦軍は揚陸用舟艇から発展した「陸戦艇」と呼ばれるACV (Air Cushion Vehicle) を数クラス採用し、指揮車両として運用していたが、74式巡航戦車は、それら陸戦艇と通常の戦車の中間的な存在といえる。かつての旧世紀時代、巡航戦車というカテゴリーは、防御力を犠牲にして機動力を重視した戦車を指したが、74式巡航戦車の特徴は大型の車体と長大な航続距離にあり、その設計を見る限り、対戦車戦は意識されていないようである。本車の

■ M74-A4/74式巡航戦車。アフリカ戦線で確認されたのは、このA4型である。巨大な連装ビーム・キャノンを張りかざした姿は勇ましいが、大戦中の戦車は惨憺たるものであった。



砲塔は、砲塔というよりは指揮塔ともいべき外観を持ち、その両脇に長砲身のビーム・キャノンを各1門搭載している。メガ粒子砲は本来、宇宙艦の艦砲として実用化された兵器であり、これを2門も採用した本車は、当時の陸軍車両としては非常に冒険的な設計であったといえる。しかし、この連装ビーム・キャ

■ M78-A/78式浮行を道う航空機”である。場合によって、被弾に弱く、この点が、連邦軍内を決定づけられ、まれていない。しかも軍用モビルスーツ、車が思ひ違われる。確かである。

リーズとの部品共
「ム・キャンオン」が
された内の19機が
「バレット」作戦に参加
援部隊に配備され
合もあったという。

ト」の両作戦に投入
RGM-79シリーズで
ー工廠で開発生産
ー一段落すると後方
一方、掃討作戦の
したG型系列の機
はしている。G型系列は
質部が特徴で、後
アフリカ戦線と得
の他にA型やC型、
ているが、これらは
ションである。

RTX-44以前のもの
用舟艇から発展し
on Vehicle)を数
いたが、74式巡航戦
的存在といえる。
ゴローは、防御力
したが、74式巡航戦
あり、その設計を
ようである。本車の
砲塔というよりは
ともいうべき外観を
その両脇に長砲身の
・キャンオンを各1門
ている。メガ粒子砲
宇宙艦の艦砲とし
化された兵器であ
れを2門も採用した
当時の陸軍車両と
非常に冒険的な設計
たといえる。しか
の連装ビーム・キャ

ノンの威力はまだ低く、後に78式浮行戦車に用いられた
タイプに比べると、かなり見劣りがするものであった。メガ
粒子砲の利点を活かして長距離精密砲撃を行うのが、本車が
想定していた任務のひとつであったが、主砲の出力不足は、
本車の用途を狭める結果となった。

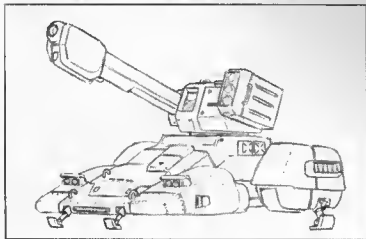
大戦中、装軌式戦車が、モビルスーツに対抗するためには、
待ち伏せが最善の策であった。初期の連邦軍は、しばしば戦
車を地面に埋めてザクを迎撃しており、大戦末期には、これ
を模倣した公国軍も、自軍のマゼラ・アタック戦車を構築陣
地に入れて対モビルスーツ戦を行っている。結論からいえば、
車体が大きい割に火力の弱い74式巡航戦車は、こうした待ち
伏せ戦術に不向きであり、本車でザクに挑むのは非常に困難
であった。そのため、戦闘正面より外された本車は、長距離
のバトロールなど二線級の任務に充てられ、モビルスーツと
の交戦は極力避けられることとなった。自走メガ粒子砲とい
う貴重な車種でありながら、走行性能に重点がおかれ主砲が
貧弱という、どちらつかずの仕様が本車の運命を決定づけた
といえる。

■ M78-A/78 式浮行戦車

“MSキラー”の異名でアフリカ戦線の公国軍將兵に恐れら
れた連邦軍戦闘車両。名称こそ戦車だが、いわゆるACVであ
る。不整地走破能力において通常の装軌式戦車を上回るが、
その構造上、車体に施すことができる装甲に制限があるため、
防御力に難点がある。一般論として、ACVは車両よりも航空
機に近い性格を持ち、航空機に比べ乗員の育成が容易な点、
機体価格や維持コストが安価な点、そして、運用に際し滑走
路が不要な点がメリットとなる。ACVの軍事転用の歴史は古
く、揚陸用舟艇として、また、地雷啓開車両として各国が研
究開発を進めてきた。

78式浮行戦車は、ホバー推進機関を内蔵した低いシルエツ

■ M78-A/78式浮行戦車。本車は“地
を這う航空機”であり、歩兵の重火器
ですら、場合によっては致命弾となり
得る程、被弾に弱かった。
この点が、連邦軍内部における低評価
を決定づけたらしく、後継車両には恵
まれていない。しかし、大戦当時の公
国軍モビルスーツ・パイロットから、本
車が忌み嫌われる存在であったことは
確かである。



トの車体の上面に、回転式の小型の砲塔を備え、主砲であるビーム・キャノンの砲身を砲塔の右側面に外装するスタイルを採っている。このビーム・キャノンは対モビルスーツ用としても十分な威力を持ち、大戦中のモビルスーツ用ビーム・ライフルと比較しても遜色ない出力を誇った。元々、連邦軍はメガ粒子砲の小型軽量化に熱心であり、本車に採用されたタイプの他にも、航空機搭載用として研究開発され、ハービック社のFF-X7 (Bst)「コア・ブースター」の主武装に選定されたタイプなど、数種類が実用段階にあった。連邦軍がモビルスーツ用ビーム・ライフルの実戦化に際して、公国軍に先んずることができたのは、この方面に関する技術的蓄積が大きく影響したのであろう。

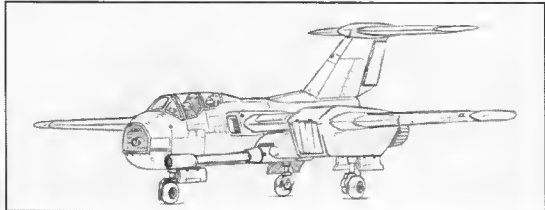
大戦中のアフリカ戦線において高速巡航性能を買われ、威力偵察任務などに重宝された78式浮行戦車だが、戦後、本車のコンセプトを継承する車両は現れなかった。連邦地上軍は、これまでACVが担ってきた役割の大半を、モビルスーツとSFSのチームに代替させたのである。U. C. 0150年代に入り、ザンスカール軍がメガ粒子砲搭載の2人乗り戦闘車両としてZMT-A03G「ガリクソン」を採用しているが、これは二輪走行システムによる機動力の獲得を狙ったものであり、ACVである78式浮行戦車とは、別の系統と言わざるを得ない。

■バトライト Bd-AF-01A/B

「マングース」 対地攻撃機

左右非対称の双胴双発という特異な形状で知られる、複座の対地攻撃機。技術的には、旧世紀末の機体から特に発達は認められず、コアファイター（中核戦闘機）構想によって開発された機体群の中でも、かなり初期段階のものである。事実上、連邦空軍が採用した最初の近接支援用攻撃機であり、大戦勃発時には既に部隊配備が行われていた。ミノフスキー粒子散布下における運用を前提として、主武装に誘導兵器ではなく75ミリ対戦車砲を選択しているが、これは本機の先進

■BD-AF-01A「マングース」。75ミリ対戦車砲を武器に、オデッサ攻略作戦やアフリカ戦線で活躍したのがこのA型である。B型は少数機による重要施設爆撃など特殊な作戦に投入された記録があるが、具体的な仕様は不明である。



註10: ターボジャックス型ターボファン

註11: 航空機搭載が使用される安定装置

を備え、主砲である
に外装するスタイル
対モビルスーツ用と
モビルスーツ用ビーム・
だった。元々、連邦軍
本軍に採用された
究開発され、「ハー
」の主武装に選定
あった。連邦軍がそ
に際して、公国軍に
関する技術的蓄積が

航性能を買われ、威
車だが、戦後、本軍
った。連邦地上軍は、
モビルスーツとSFS
0年代に入り、ザン
戦間車両としてZMT-
これは二輪走行シス
あり、ACVである78
得ない。

ス」対地攻撃機
大で知られる、複座
機体から特に発達は
機)構想によって開
発されたものである。事
援用攻撃機であり、
いた。ミノフスキー
と武装に誘導兵器で
、これは本機の先進



註10：ターボジャックRB-5「フェニックス」型ターボファン・エンジンである。

註11：航空機搭載カメラなどの架台に使用される安定装置。

性を示すものとは言い難く、むしろ、迷走する整備計画が生み出した異端児的な存在であったようだ。実際、当時の軍当局に確固たる戦術思想が存在したわけではなく、本機の生産が原型機、増加試作機を含めわずか156機で終了している事実が、全てを物語っている。双胴双発形式が採用されたのは、全長、全幅共に15メートル以下という軍当局からの要求に応えるためであり、左側の胴体はエンジン(註10)がぎりぎり収まる寸法しかない。外観上の最大の特徴ともいべき長砲身の75ミリ対戦車砲は、主翼下面、2つの胴体の間に設けられたジンバル機構(註11)内蔵のマウントによって保持される。また胴体内の爆弾倉にAGH-8568「ファットキャット」対地誘導ミサイル2発、さらに翼下パイロンにはビーツG-8ロケット、8-108爆弾など最大6430kgが搭載可能であった。この他、爆弾層に35ミリ砲弾1750発を格納したガンシップ仕様など、武装には幾つかのバリエーションが存在したらしい。

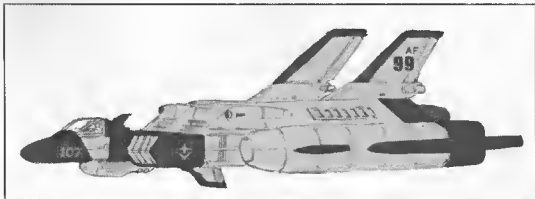
低空・低速時の性能と兵器搭載量を重視した本機は、本来の用途である対戦車・対施設攻撃には良好な成績を収め、75ミリ対戦車砲の高い命中率は、現場からも高評価を得た。しかし、モビルスーツに対しては分が悪く、巨大な対戦車砲を抱えて低空を飛行する本機は対空射撃の格好の餌食となった。また、上面装甲に弱点を抱える戦車と異なり、宇宙空間での運用を前提に開発されたモビルスーツには、極端に装甲の薄い箇所が少ないため、75ミリ程度の中口径砲でモビルスーツをノックアウトするのは非常に困難であった。とはいえ、大戦後期には公国軍モビルスーツが少数で行動する機会が増えたこともあり、地上部隊との連携のもと、対モビルスーツの撃破スコアを記録するマングース乗りも現れたという。

アフリカ戦線においては、掃討作戦の先発部隊として、相当数の本機が公国軍の撤退ルート監視の任務に充てられた。航空支援のないまま、地上を移動する公国軍部隊にとって本機は死に神同然であり、紅海への道筋には焼け爛れた公国軍車両が点在するありさまとなった。

■ハービック「フライ・マンタ」戦闘爆撃機

最高時速マッハ3.6を誇る単座の高速戦闘爆撃機。本機は様々な運用条件に適合できる複合任務機であり、制空戦闘や局地防空もこなすが、大戦中は強力な固定武装を活かした対地攻撃機として、近接航空支援に多用された。本機を装備した飛行隊は極めて多く、大戦中の連邦空軍機の中で最もビュラーな機体であったといえる。

コアファイター(中核戦闘機)構想以前に設計された機体であり、ミノフスキー粒子が散布された戦場では、ドップに苦戦することもしばしばであったため、本機の空戦能力は酷



■F-79「コア・ブースター」。他のファミリー機と同様、8メートル級の小型戦闘機FF-X7の後部に、別設計の大型ブースターを取り付けたスタイルを持つ。ブースター部上面にある2つの小さな影みは、対地用のエネルギーCAP式ビーム・キャノンである。

評されることも多い。しかし大戦後期には、すっかり数の減った公国軍戦闘機を圧倒して、地上部隊の進撃を空からカバーする活躍を見せた。

とはいえ、本機の真価は、やはり強力な対地攻撃能力にある。機首両側の3連装ランチャーに装填された対地ロケットは、地上の公国軍を駆り立てるのに猛威を振るった。アフリカ戦線の掃討作戦においては、上陸軍の露払いとして多数が投入され、実用化間もない自軍モビルスーツの支援任務を果たしている。

■F-79「コア・ブースター」 対地攻撃機

ハービック社の傑作両用戦闘機FF-X7(Bst)「コア・ブースター」ファミリーの一員と思われる本機は、アフリカ戦線で運用された最新鋭の対地攻撃機である。そもそもコア・ブースターとは、コアファイター（中核戦闘機）構想の副産物として誕生した機体であり、開発試験機としてFF-X7(Bst)が製造されたのを皮切りに、設計を簡略化した戦闘爆撃機であるFF-X08「コア・イージー」が、大戦末期に生産ラインに乗せられるまで、幾度かの改設計が行われた。しかし、開発元であるハービック社が戦後消滅したこともあり、ファミリー機の細かな位置付け、開発経緯等には不明な点が多く、F-79の具体的な機体性能や配備状況は分かっていない。

戦時中、アフリカ戦線で本機と対峙した公国軍兵士の手記などによると、F-79型は連邦空軍の対地攻撃機の中でも最高クラスの性能を持つと賞賛されており、機載したビーム・キャノンによる急降下攻撃は大変に恐れられていたという。FF-X7(Bst)の戦歴などを見る限り、コア・ブースターの機載ビーム・キャノンは、モビルスーツの胴体部装甲を貫通するのに十分な威力があったと推測され、大気によってビームが減衰する地球上でも、本機が最も警戒すべき存在であることに変わりにはなかった。



は、すっかり数の
の進撃を空からカ

対地攻撃能力にあ
れた対地ロケット
振った。アフリ
払いとして多数が
ツの支援任務を果

対地攻撃機

st)「コア・ブース
、アフリカ戦線で
もそもコア・ブー
) 構想の副産物と
てFF-X7(Bst)が製
戦闘爆撃機である
生産ラインに乗せ
しかし、開発元で
り、ファミリー機
点が多く、F-79の
ない。

公国軍兵士の手記
撃機の中でも最高
機載したピーム・
られていたという。
ブースターの機載
部装甲を貫通する
によってピームが
き存在であること

Chapter 3

Illustrations

Man & MobileSuit #01'



■連邦軍モビルスーツパイロット

連邦陸軍のモビルスーツ・パイロット。彼が身につけているのは陸軍において最もスタンダードなタイプだが、宇宙軍や空軍でもほぼ同一のものを使用していた。今次大戦にて戦場の主役となったモビルスーツに対して、ノーマルスーツとも呼ばれるこれらの装備は、その機密性の高さ故、アフリカ戦線では不評であったらしい。



■連邦軍 RMV ガンナー

RMV-1「ガンタンクⅡ」の女性搭乗員が着用した軍装の一例。パイロットスーツの上からジャケットを羽織っているが、基本的に通常のモビルスーツ・パイロットと同じスタイルである。ただし、ヘルメットのバイザーにスコープが取り付けられているのが目を引く。搭載火器の照準を担当するガンナー特有の装備であるようだ。

■公国軍下

地球上への環境にあ...
る。中でも...
力では、軍装...
が必要とされ...
につけてい...
と略帽、日...
リカ軍団向...

アフリカ戦線の軍装

Military Uniforms (Africa battle line U.C.0079)



■公国軍下士官

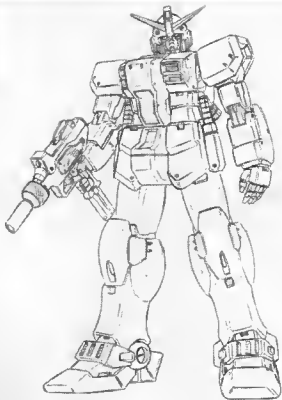
地球上への出兵にあたり、公国軍は各地の環境にあった軍装を複数種用意している。中でも、過酷な環境で知られるアフリカでは、軍装面においてもそれなりの装備が必要とされたようだ。上図の下士官が身につけている官給品の内、カーキ色の上衣と略帽、日差し避けのフードなどは、アフリカ軍団向けのものであろう。

■公国軍突撃兵

アフリカ戦線における公国軍突撃兵の典型的なスタイル。ラウンドムーバー（パーソナル・ジェット）を背負い、鉄帽の上には、オートバイ兵と共通のゴーグルを掛けている。腰の銃は、タイガー70-Rより銃身の短い近接戦闘用の制式SMG。ベルトには手榴弾を2発装着している。

アフリカ戦線のモビルスーツ

MobileSuit (Africa battle line U.C.0079)



▲RX-78XX「ビクシー」

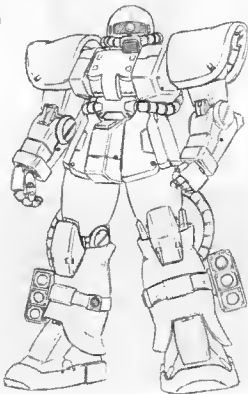
陸軍主導で開発されたG-4計画機。地球上での運用を前提とした機体で、コア・ブロック機構は廃されている。合計3機が生産され、1号機はベルファスト基地に、2号機はオデッサ方面に、3号機はアフリカ戦線へそれぞれ送られた。上図は、正確な仕様が判明している唯一の機体で、アルバトロス特務中隊によって実戦を経験した2号機である。この2号機と、3号機との相違は不明だが、腰部のビーム・ダガーは2号機のための装備であったという。果たして“アフリカ戦線唯一のガンダム”ことビクシー3号機は、掃討作戦に投入されたのであろうか？

▼シオニックMS-06J「ザクII」

U.C.0079年11月

「青」部隊所属機

オデッサの敗戦から間もない頃の「青」部隊は、MS-06J「ザクII」やMS-07B「グフ」などの混成であり、MS-06D「デザート・ザク」への機種統一には更なる時間が必要とされた。上図は、当時の「青」部隊で運用されていたザクを、記録写真をもとに再現したものである。左肩部にドム用の装甲板を強引に取り付けているのが面白い。残念ながら写真では右腕の状態は判別できないのだが、上図では左腕と同仕様としてみた。この程度の比較的簡単な改造は、現地の整備班員によって盛んに行われていたようだ。



6]「ザクII」

1月

部隊所属機

ら間もない頃の
「ザクII」やMS-
であり、MS-06D
機種統一には更
した。上図は、当
目されていたザク
に再現したもので
用の装甲板を強引
が面白い。残念な
気持は判別できな
三腕と同仕様とし
七紋的簡単な改造
によって盛んに行



Chapter 4

Keyword

Man & MobileSuit #01'

Chapter 4

アフリカ戦線小事典

■「青」部隊名

「青」部隊は、恐らくアフリカ戦線において最も著名な公国軍部隊であり、「ロンメル軍団」として、敵味方の双方から敬意を払われた。しかしその知名度と反比例するかのように、詳しい戦歴については、あまり知られていないのが実状である。

公国軍は、戦線が地球上にまで拡大したことを受けて、かなり初期の段階で兵器開発局(モビルスーツの研究開発を統括した政府機関)の地球派遣を決定している。この中で最大規模のものがカリフォルニア基地に設置された一大センターであるが、アフリカにも、同局の出先機関が設けられることとなった。この時、同局付きの部隊としてアフリカ行を命ぜられたのが「青」部隊である。専ら審査部隊としての役割を担わされた彼らは、各種のアフリカ戦線向け局地戦用機材の実用化に貢献したものと思われる。後年、「青」部隊はグリラ化し、長期に渡って現地に潜伏し続けるが、この間、保有するモビルスーツを整備・維持できたのは、彼らが兵器に関して一般将兵を上回る専門的知識を有していたためと推察される。

さて、戦況の悪化に伴い、在アフリカの兵器開発局スタッフには引き揚げ命令が下され、「青」部隊は任務を解かれることとなった。現地に残された「青」部隊は、最前線に編入されたが、彼らは、持ち前の高いモビルスーツ操縦技術を活かして、短期間でアフリカ軍団の中核的存在へ



■ロンメル中佐とその副官カレン・シュ。戦線に耐えるために、顔で保護したマントを軍服の上から羽織っている。彼らはスペースノイドであるが、砂漠での生活が長期に及んだため、肌が黒く日焼けしている。

と成長した。部隊長ロンメル中佐は熱心なザビ家の信奉者である壮年の士官で、前線指揮官としての秀でた能力と、モビルスーツ・パイロットとしての技量を兼ね備えた希有な人物であった。指揮官としての彼の本領は、モビルスーツ、戦車など手持ちの戦力を最大限に利用したグリラ戦で発揮された。連邦軍側の戦史には、二手に分けたモビルスーツ隊をいずれも固に使い、潜入させた工作員に倉庫を爆破させるなど、相手の心理の裏をついたロンメル中佐の巧みな作戦が記録されている。

U.C. 0079年11月26日の「北アフリカの戦い」で公国軍が大敗、戦線が瓦解した後、「青」部隊は通信を途絶、現地司令部もその所在を掴めない状態になってしまう。ロンメル中佐は部下将兵と共に、軍上層部からの帰還命令を無視してサハラ砂漠西部に潜伏する道を選んだのである。この抗命事件に対する評価は様々であるが、中佐の戦意が些かも衰えていなかったことは確かであり、彼は、命令を遵守する軍人としてではなく、敵に背を向けることを良しとしない武人として行動したといえる。

終戦後、抵抗を続けた旧公国軍残党諸部隊が次々に武装解除される中、「青」部隊はひたすらに潜伏を続けた。この間、彼らは、保有兵器の改修作業に力を入れ、戦力を保持し続けたが、周囲と隔絶した砂漠のオアシスを拠点としていたため、連邦軍との交戦機会はさほど多くなかったらしく、一説に拠れば、殆ど戦闘らしい戦闘を経験しないまま、数年間の月日が流れたともいう。アフリカ戦線における敗北から8年を経たU.C. 0088年6月、旧公国軍残党諸派の最大勢力、ネオジオンが地球派兵に踏み切り、同年8月には宰相ハマーン・カーン直率の本隊がアフリカを目指し降下する。同月9日、総統ミネルバ・ラオ・ザビ女王ダカール入城の報に接したロンメル中佐は、今や数十名(現地義勇兵を除くと僅か9名であったという異説もある)となった部下を率いて、ハマーン軍に合流する決断を下した(実際には、この時点ではダカールは陥落しておらず、ハマーン軍先鋒のライン・ドラゴン、ルイ・バザールに誘わられ、ダカールを目指して進撃中であった。ハマーン軍の急速な進撃が、先走った誤報を生んだものと思われる)。しかし、その直後、「青」部隊は不運にも、ダカールを挟撃すべくサハラ砂漠を横断してい

た AEU (Ante) 連邦組織) まう。最新説のモビルスーツを運ぶこと、メル中佐も戦後まで残された愛機MS-09H ザート・ザク用のMS-06Eをずれにせよ微

■アデン【地】
かつての火の
アラビア半島の
衰退以来、
割を果した
ピア海に面す
が、宇宙世紀
事都市化が進
大戦勃発後、
陸の大半を席
設を持つアデ
の抵抗を排除
を支配下に納
よく知られる
フリカ及び中
非常に重要な
部に分散配置
ム」ディック
で呼ばれた3
に陥むババ
した。結果的
警戒網を突破
け入れ、彼ら
アデン基地司
の将兵は、自
友軍の帰還を
高い評価を受

■アフリカ軍
地球降下作
軍部隊が派遣
の方面軍に分
随にはキマリ

佐は熱心なナビ
、前線指揮官と
ース・パイロ
有な人物であつ
モビルスーツ、
に利用したグリ
戦史には、二手
ずれも図に使い、
交さるなど、相
中佐の巧妙な作

「アフリカの戦い」
後、「青」部隊
の存在を掘めな
メル中佐は部下
命令を無視して
選んだのである。
後であるが、中
かったことは確
る軍人としてで
しとししい武人

軍軍機先諸部隊が
、部隊はひたすら
らは、保有兵器の
保持し続けたが、
スを拠点としてい
はさほど多くな
、殆ど戦闘らしい
司の月日が流れた
ける敗北から8年
国軍残党諸派の最
兵に踏み切り、同
軍直率の本隊が
同月9日、総統ミ
入城の糧に飽れ
軍（現地義勇兵を
を具説もある）と
ン軍に合流する決
戦点ではダカール
軍先鋒のライン・
諸将が、ダカール
ハーマン軍の急進
んだものと思われ
部隊は不運にも、
戦況を察断してい

た ABUG (Anti Earth Union Government/ 反地球連邦組織) のモビルスーツ部隊と遭遇してしまふ。最新鋭のアナハイム機と交戦の末、全てのモビルスーツを喪失した「青」部隊は、目的を達するこなく壊滅。この時の戦闘で、ロンメル中佐も戦死している。なお、「青」部隊に最後まで残されていた可動機は、ロンメル中佐の愛機 MS-09H「ドワッジ」と、8機程の MS-06D「デザート・ザク」が全てであり、この他に、偵察用の MS-06E を1機保有していたともいうが、いずれにせよ微々たる戦力であった。

■アデン【地名】

かつての火山口を中心に市街地が建設された、アラビア半島南端に位置する商業都市。モカ港の衰退以来、コーヒーの輸出港として重要な役割を果たしたことも有名である。紅海とアラビア海に面する海運の要所として知られてきたが、宇宙世紀においては宇宙港が建設され、軍事都市化が進められた。

大戦勃発後、アラビア半島北部とアフリカ大陸の大半を席巻した公国軍は、貴重な宇宙港施設を持つアデンを目標に定めた。微弱な連邦軍の抵抗を排除しつつ南下した公国軍が、アデンを支配下に納めたのは大戦中期頃と推察される。よく知られるとおり、大戦末期にアデンは、アフリカ及び中東地域の公国軍の脱出路として、非常に重要な役割を果たした。アフリカ大陸東部に分散配置されていた公国軍諸部隊は、「トム」「ディック」「ハーイ」というコードネームで呼ばれた3つのルートを定め、アデンを対岸に臨むバーク・アルマンデブ海峡へ向けて撤退した。結果的にアデン基地は、連邦軍先発隊の警戒網を突破した多数のアフリカ軍団将兵を受け入れ、彼らを宇宙へ送り出している。その際、アデン基地司令マックガイア少将と基地守備隊の将兵は、自らは地上に留まりつつ、撤退する友軍の帰還支援に多大な貢献を果たしたことで高い評価を受けている。

■アフリカ軍団【組織名】

地球降下作戦に伴い、地球上には多数の公国軍部隊が派遣されたが、これらの部隊は幾つかの方面軍に分かれていたとされる。アフリカ大陸にはキリマンジャロ基地に司令部を置くアフ

リカ方面軍が組織されたというのが定説だが、当時の公国軍の編成については、幾つかの異なる見解があり未確定である。複雑極まりなく、また、時期によって変更が加えられた可能性もある軍編成については、まだまだ研究の余地が残されているといえる。

一般的に、軍団 (Corps) とは、複数の師団 (Division) を編合した部隊組織を指すが、公国軍の地球方面軍 (地球攻撃軍、あるいは地球制圧軍とも表記される場合がある) は5個師団で構成される陸上機動師団という単位を用いるなど、新興国家らしい独自の要素が強く、過去の多くの資料に見られるアフリカ軍団なる野戦組織が、具体的にどの程度の戦力から成り立っていたのか、推察することは難しい。

■アルフレディーノ・ラム【人名】

突撃機動軍の士官で、終戦時の階級は少尉。地球方面軍カリフォルニア基地直属支援戦闘モビルスーツ中隊に所属し、北米大陸の各地を転戦したが、一部資料によれば北アフリカ戦線に従軍したとされる。しかし、少尉がフロリダで終戦を迎えていることから、これには疑問が残るのも事実である。MS-06K「ザク・キャノン」を乗機とした数少ないパイロットの1人であり、乗機に描かれた「ペンギンとロケット」のパーソナル・マーキングは有名である。

■FLN【組織名】

宇宙世紀に入るとアフリカ大陸の各地では、連邦政府に対する独立運動が盛んとなり、武力に拠る目的の達成を狙った民間武装組織も数多く結成された。こうした武装組織が生み出された背景には、連邦政府による強硬な宇宙移民政策が存在する。巨大な移民枠を割り当てられたアフリカ諸地域の不満は、独立派による反連邦活動となって噴出し、その矛先はヨーロッパ系住民へと向けられることもしばしばであった。そして、アフリカの混乱に拍車を掛けたのが、ジオン公国が引き起こした戦乱である。戦災による被害もさることながら、終戦後にアフリカに残留した大量の両軍将兵の存在は、政情不安の新たな要因となった。復興需要が落ち込むにつれ、失業軍人らによって構成された匪賊・野盗の類が急増し、旧来の反連邦派の民族ゲリラや旧公国軍残党と共に連邦軍を苦しめることと

なった。やがて、独立派グループと単なるアウトロー集団の境界は曖昧なものへと移り変わり、豊富な余剰兵器で武装した様々なグループが、アフリカ中に乱立するに至った。「アフリカ独立戦線」「反連邦主義同盟」「フェダーイン」「正義の志士」「青の部隊」などがそれにあたる。

当時のアフリカに存在した多数の武装組織の中で、過激な民族主義と反連邦色で知られたのがFLN (Front de Liberation Nationale/アフリカ民族解放戦線)である。この組織はガデバ・ヤシン率いる「アフリカ独立戦線」を中心に、トゥアレグ族系の「青の部隊」など複数の民族ゲリラが連合したもので、結成された正確な時期は不明ながら、U.C. 0080年代後半に非常に活発な動きを見せた。

なお、単にFLNといった場合、旧世紀におけるアルジェリア国民解放戦線を指す場合もある。こちらのFLNはフランス植民地支配の打破を目的として、アルジェリア国内の革命運動団体が統合した組織であり、傘下の武装組織ALNを指導して革命を戦った。独立達成後は激しい内部闘争を繰り返しつつも、長きに渡ってアルジェリア唯一の政党としての地位を保ち、一党独裁体制を30年近く続けたことで知られる。



■「海の狼」ことエーリッヒ・ハルトマン少佐。スペースコロニー国家の軍隊である公国軍において、潜水艦の乗組員育成は非常に困難であり、仮に潜水艦が未帰還となると、その人的損害を回復するのは不可能に近かった。U-202の喪失は、即ち人材の大量喪失であった。

■エーリッヒ・ハルトマン【人名】

エーリッヒ・ハルトマン少佐は、アフリカ大陸東岸沖で挙げたおびただしい戦果で知られる公国軍の潜水艦艦長である。インド洋における公国軍潜水艦の活動はかなり活発なものがあられ、水中用モビルアーマーの運用記録も残されているほどであるが、彼の艦、U-202の活躍は、その中でも指折りのものである。第20潜水艦隊に所属していた少佐は、大陸東岸に押し寄せた連邦軍揚陸艦隊の前に立ちふさがり、驚嘆すべき戦闘精神を持って奮戦した。アフリカを放棄する

方針を固めていた軍上層部は、数度に渡って帰還命令を下すが、少佐はこれを無視してあくまで攻撃続行を指示。結局、U.C. 0079年12月13日に撃沈されるまで、U-202が両面でも挙げた戦果は揚陸艦8隻に及び、返り討ちにした駆逐艦も3隻に達した。

■OAS【組織名】

OAS (Organisation Armee Secrete/秘密軍事組織)とは、A.D. 1961年2月、当時、フランスの植民地であったアルジェリアの独立に反対するフランス軍人や現地フランス人過激派によって結成された地下武装テロ組織である。フランス軍アルジェリア派遣軍の元司令官ラウル・サララン将軍を中心に、アルジェーとマドリッドの地下で密かに組織されたこの極右グループは、フランスと植民地側の休戦交渉の場となったエヴィアン市の市長をプラスチック爆弾で爆殺したのを始め、45件の暗殺事件を引き起こし、恐怖によって植民地の独立を抑え込もうと試みた。この他にも、OASは、フランス政府とアルジェリア独立派の双方を標的に合わせて1万件以上のテロ行為を働いたが、アルジェリアは最終的に独立を果たし、悪名高きテロ組織は解体に追い込まれた。

宇宙世紀に入り、アフリカの先住民による反連邦活動が活発化すると、アフリカ在住のヨーロッパ人社会の中から、これに対抗し非合法の武力闘争を行う民間組織が生まれた。これらに対抗勢力の中に、OASを名乗るグループが存在したが、このグループとかつてのサララン将軍の組織の間には、直接的関連は見あたらない。大戦後の武器拡散に伴い、新生OASは軍隊まがいの部隊を作り上げ、FLNや「青の部隊」と激しい抗争を展開したが、彼らが活動資金を何処から得ていたのかは不明である。戦前から大戦初期にかけて、連邦軍はジオン公国への対抗措置の一環として、地球至上主義の民間過激派に援助を与え、時には共同で軍事作戦を行ったとされるが、新生OASが連邦政府の密かな援助と黙認の元、アフリカ諸地域の独立運動を牽制していたという見方も、あながち否定できない。

■カーミック・ロム【人名】

カーミック・ロムはサイド2出身の公国軍少佐・パイロットであり、後に遊撃部隊「スモ

ビオ」の部隊、がMS-06D「牙狼」が、この従事した頃かになってからの研究によってオ」へ送らななったため、のパイロットが、当時の資料にははっきりと生きている、へ移住したとマーキングでバースナルのである。

■「カラカル」

第5地上機動小隊「カラカル」率いられた特「バー」のマーキングで紅白ひとつらしく、ド4・ムーア率いる、外国人居留部隊の戦艦としてにかけての北アであるが、大戦が多く、今後「カラカル」「デザート・ザ」は、合計43機のもので、頭上からの配備である。また「カ」のアフリカ戦れており、内自身が搭乗するらしい。北ア部隊は、モビルスーツのサンド箱軍の進撃を

、数度に渡って帰
を監視してあくま
C.0079年12月13
が同方面で挙げた
に討ちにした駆逐

Secrete/ 秘密軍事
、当時、フランス
アの独立に反対す
人過激派によつ
織である。フラン
司令官ラウル・サ
ーとマドリッドの
極右グループは、
渉の場となったエ
ック爆弾で爆殺し
をを引き起こし、恐
ええ込もうと試み
ランス政府とアル
に合せて1万1千
アルジェリアは最
きテロ組織は解体

の先住民による反
フリカ在住のヨー
に對抗し非合法の
まれた。これら対
グループが存在し
のサラ軍将軍の組
あたらぬ。大戦
ASは軍隊まがいの
部隊と激しい抗
資金を何処から得
前から大戦初期に
への対抗措置の一
間過激派に援助を
を行つたこととされ
るが援助と黙認の
動を牽制していた
てでない。

2 出身の公国軍が
連撃部隊「スコー

ピオ」の部隊長に就任したことで知られる。彼
がMS-06D「デザート・ザク」を乗機としたのは
確かだが、これが中東西部に対する侵攻作戦に
従事した頃か否かの、「スコーピオ」時代にな
ってからのものなのかは不明である。最近の
研究によって、最低1機のMS-09Dが「スコー
ピオ」へ送られたらしいことが徐々に明らか
になったため、部隊長であるロム大尉がこの機
体のパイロットを務めた可能性も論じられて
いるが、当時の資料が非常に少ないため、正
確なところははっきりしない。大尉は大戦末期
の激戦を生き延び、戦後は開発が再開され
たサイド7へ移住したという。なお「スコー
ピオ」の部隊マーキングである「アラビアン」
は、元々大尉がパーソナル・マーキングとし
て用いていたものである。

■「カラカル」【部隊名】

第5地上機動歩兵師団第1モビルスーツ大隊A
小隊「カラカル」はロイ・グリンウッド少佐に
率いられた特務部隊であり、「四つ葉のクロー
バー」のマーキングで知られる。同部隊は第2
次降下作戦で紅海に降り立った多数の補充部隊
のひとつらしく、隊長のグリンウッド少佐が
サイド4・ムーア出身であることから分かる
とおり、外国人居隊である。一般的に「カラ
カル」小隊の戦歴としては、スエズ西岸から
リビア砂漠にかけての北アフリカ戦線にお
けるものがあるが、大戦初期の動向につい
ては不明な点が多く、今後の研究が待たれ
るところである。

「カラカル」小隊の装備機としては、MS-06D
「デザート・ザク」の初期型が有名である。こ
れは、合計43機が生産されたダブルアンテナ
機のもので、頭部両脇に設置された大型の通
信アンテナが特徴的な機体であり、運用試
験も兼ねての配備であったという（このダ
ブルアンテナに対する具体的な評価は不明
だが、結局、後期型ではシングルアンテナ
仕様で統一されている）。また「カラカル」
小隊には、MS-09「ドム」のアフリカ戦線
向け仕様であるD型が4機送られており、
内1機は一時期、グリンウッド少佐自身が
搭乗する指揮官機として使用されていた
らしい。北アフリカ戦線において「カラカル」
小隊は、モビルスーツを砂漠に埋めて敵を
待ち伏せするサンド・アンブッシュ戦法を多
用し、連邦軍の進撃を度々阻止したという。

■カルロス・ラディ【人名】

戦時中、連邦軍第1機動騎兵師団に所属し
たとされる連邦軍士官。最終階級は大尉。第1
機動騎兵師団はアフリカ戦線に送られた多
くの連邦軍師団のひとつで、攻撃前にデス
・カードと呼ばれる予告状をばらまいた後、
奇襲で容赦のない攻撃を仕掛けることで、
公国軍側から非常に恐れられた部隊であ
る。ラディは、同師団のモビルスーツ・
パイロットであったらしいが、戦中から戦
後にかけて行われた掃討作戦、いわゆる敗
残兵狩りにおいて、民間人虐殺を行った
容疑で収監されている。その後、軍事法廷
に告発される当日に、部下3名と共に脱獄。
その際、監視の兵を殺害した上、モビルス
ーツを強奪したことから、軍籍を剥奪され、
連邦軍より追われる身となった。

脱獄に成功した彼は、「第1コマンド部隊」
と名乗り、奪ったモビルスーツを用いて近
隣の集落を襲撃、略奪行為に明け暮れるこ
ととなる。当時のアフリカには終戦によつ
て余剰となった兵器が溢れており、彼ら
が戦力を強化するのは容易であった。「第
1コマンド部隊」は単なる野蛮な集落であ
ったが、ラディ本人は既に精神に異常を来
していたらしく、自らの行動を正統な軍事
作戦と公言してはばかっていたという。そ
んな彼の主義主張に同調して、ある失業者
の分前前にあつたため、多数の失業軍人
が合流。やがてラディの配下には100名以
上の「部隊員」と可動モビルスーツ数十機
が集まり、彼らのいうところの「激発行
動」によって幾多の集落が破壊されるに至
った。

アフリカ中西部を中心に一帯を荒らした
ラディ一味だが、襲われる現地人の方々
が反撃に出た。U.C.0088年、「第1コマ
ンド部隊」の「軍事使節」によって生活
物資の供給を命ぜられたカリブ村は、退
役軍人らを中心に中心とした傭兵を雇
い、武装自警団を編成、ラディ一味に反
抗する構えを見せた。これを「連邦政府
に対する反逆行為」と見なし、激怒したラ
ディはカリブ村に対する懲戒を決意する
が、武装自警団の側も、武器商人からモ
ビルスーツを購入するなど戦力を整えて
いた。ラディは、この武装自警団相手
の戦線で落命し、リーダーを失った「第
1コマンド部隊」も消滅した。

当時のアフリカには、戦を失い帰るべき
故郷もないスペースコロニー出身の失業
軍人が溢れ

ていたが、彼らの中にはラディ同様、略奪行為に手を染める者も多かった。また長期に渡るグリラ戦の中で、目的を見失った旧公国軍将兵が匪賊となる例も散見され、独立運動で揺れるアフリカ諸地域の治安を、さらに悪化させる要因となった。

■「キラビー」【部隊名】

蜂を因案化した独特のマークで知られる「キラビー」隊は、MS-06D「デザート・ザク」を装備するモビルスーツ部隊だが、戦時中の記録が極端に少ないため、現在判明しているのは、本部隊が中東南部の作戦に投入されたらしいこと程度である。そして戦後、「キラビー」隊が追った数少ない運命はさらに興味深い。従来の保有機デザート・ザクに加えてRGC-80「ジム・キャノン」を受領して、連邦軍ジャブロー基地に送られていたのである。「キラビー」隊はU.C.0087年のAEGUによるジャブロー強襲攻撃に際して、防衛側部隊のひとつとして出動しているが、公国軍の一部隊だった「キラビー」隊が、何故ジャブローに残されていたのか、非常に不可解である。戦時中、激戦区である中東方面に派遣されていることから、本部隊は外国人部隊であった可能性が指摘されている。もし「キラビー」隊がジオン国民以外のサイド出身者なり月面都市出身者で編成されていたならば、終戦とそれに伴う公国軍の占領地域撤退によって、部隊ごと連邦軍に編入されていても、さほど不自然ではない。また、戦後の連邦軍は、しばしばジオン共和国軍に部隊派遣を要請し、自軍の指揮系統に組み入れているが、「キラビー」隊が、そうした理由でジャブロー防衛に駆り出されていた共和国軍部隊であった可能性も残されている。この場合、本部隊が受領したジム・キャノンは、連邦軍から供与されたものと考えるのが自然であろう。

■キリマンジャロ【地名】

アフリカ大陸の最高峰。タンザニア地区とケニア地区の境界線上に位置する火山で、シラ山、キボ山、マウエンジ山の3つの峰を持つ。ちなみに「キリマ」は山、「ンジャロ」は輝くを意味するといふ。

宇宙世紀初期、移民政策促進の切り札として、キリマンジャロ山に巨大な宇宙港が建設された。

山腹には長大なリニア・レールが築かれ、移民を満載したシャトルを連日送り出していた。移民計画が一段落した後も、宇宙港の施設はそのまま残されていたが、大戦の勃発とアフリカ大陸への戦線の拡大によって、公国軍による接収を受けることとなった。宇宙空間のラグランジュ・ポイントを本拠とする公国軍は、本国との連絡路の確保を重要視しており、パイコヌール、アデンなど各地の宇宙港を次々に武力制圧していったが、キリマンジャロの占領もその一環であった。

大戦中、キリマンジャロ宇宙港は基地化され、公国軍アフリカ方面軍の司令部がおかれた。当時のキリマンジャロの様子については記録が非常に少ないが、レアメタルやウランなどの鉱物資源の積出港として、あるいは本国やガラナダからの補給物資の集積地として、久々の活気を取り戻していたものと思われる。

戦後、アフリカ残留の旧公国軍部隊が武装解除されると、キリマンジャロは再び連邦政府の管理下におかれることとなった。U.C.0084年、発足直後のティターンズはこの地に要塞の建設を開始。やがて、南米・ジャブロー基地の移転放棄が決定されたことで、キリマンジャロの軍事施設としての重要性は否応なしに増大した。そして、キリマンジャロ要塞は、内乱期におけるティターンズ側有数の拠点へと発展を遂げたのである。U.C.0087年11月にはエウゴ・カラバ共同軍による攻撃を受けたため、要塞の山頂部施設は殆ど壊滅してしまい、キリマンジャロは基地機能の大半を喪失した。翌U.C.0088年9月には山麓部の基地施設が、ハマーン・カンが直接指揮する、戦艦「サダラン」によって電撃的に制圧され、ダカールより転進したハマーン軍諸部隊が宇宙へ撤兵するまでの期間、暫定的な集結地として利用されている。

■キンバーライト（キンバリー岩）【鉱物名】

オレンジ自由国の鉱山町キンバリーに由来して名付けられた、オリビン（かんらん石）と雲母からなるマントル起源の火成岩。ダイヤモンドの母岩として知られる。ちなみにノイエン・ビッター崖下の第3突撃機動師団の残兵が潜伏したキンバーライト鉱山基地は、ダイヤモンドの露天掘り鉱山跡に地下陣地を構築するなどして拠点化したもので、地名としてのキンバリー



とは無関係で、位置する)。

■ジャミトフ アフリカ戦

U.C.0079年11月、リカ大陸奪回作戦開始からほぼ1年が経過した。直後の部隊は、団を潰走させて、その彼方の才能はジャブローの宇宙艦隊司令官として地球を見せた。U.C.0083年に、な武装蜂起事、中心的な役割を演言により新設の総帥に就任。8月には連邦軍に認められていた艦「グワダニール」を、ハマーン・カンによって刺殺された。守りの筋金入りの宇宙戦中の戦艦やテラ・ドムを有していたこと、反動的な軍人としての、生産力強引な手法と

が築かれ、移民
を出していった。
宇宙港の施設はそ
の発展とアフリカ
公国軍による接
空間のラグラ
ン国軍は、本国と
り、パイコヌ
と次々に武力制圧
の占領もその一

港は基地化され、
が敷かれた。当
時は記録が非
ラグラなどの鉱物
は本国とグラナ
ダ、久々の活気を
与えた。

軍部隊が武装解
散を再び連邦政府の
と、U.C. 0084年、
地に軍庫の建設
ブロー基地の移転
リマンジャロの軍
なしに増大した。
は、内乱期におけ
と発展を遂げた
はエウゴ・カラ
ため、要塞の山頂
キリマンジャロ
型U.C. 0088年9
ハーマン・カー
ン」によって
より転進したハ
するまでの期間、
れている。

一岩)【鉱物名】
ンバリーに由来し
かんらん石)と雲
母岩。ダイヤモンド
なしにノイエ
ン団の残兵が潜伏
は、ダイヤモンド
を構築するなどし
てのキンバリー



■(左) ジャミトフ・ハイマン准将。連邦政府の財務官僚と深いコネクションを持つ彼は、単なる軍人ではなく、幅広い支持基盤を有する政治家でもあった。俗説では、秘密結社フリー・メーソンの復活を画策していたとされる。

■(右) 汚れた軍服を身に纏ったジョン・クレスト2等整備兵。正規のパイロット養成訓練を受けていないにも関わらず、短期間でエースとなった彼は「ニュータイプ」ではないかと噂された。なお、宇宙に帰還した彼の戦後の動向については不詳である。



とは無関係である(同基地はタンザニア地区に位置する)。

■ジャミトフ・ハイマン【人名】

アフリカ戦線で名声を馳せた白髪の老将軍。U.C. 0079年11月中旬より行われた連邦軍のアフリカ大陸奪回作戦において総指揮官を務め、作戦開始からほぼ1ヶ月で目的を達成する手前を見せた。モビルスーツ中心の新編成へ改変した直後の部隊を率いて、歴戦の公国軍アフリカ軍団を潰走させたことから、軍事的指導者としての彼の才能は疑いなくともであろう。戦後はジャブローの軍本部へ異動し、当時の連邦軍宇宙艦隊総司令官ジーン・コリニー大将の腹心として地球圏の治安維持に注力。特に、U.C. 0083年に発生した公国軍残党による大規模な武装蜂起事件に際しては、対抗作戦の立案に中心的な役割を果たした。同年12月、自らの提言により新設された治安維持部隊ティターンズの総帥に就任。大将への昇進の後、U.C. 0087年8月には連邦軍統合作戦本部長として議会の承認を受けている。翌U.C. 0088年1月25日、旗艦「グラワン」艦内で行われたアクシズ宰相ハーマン・カーンとの会談の席上、アクシズ側の刺客によって暗殺される(犯人については諸説あり)。保守的な地球中心思想の持ち主であり、筋金入りの宇宙植民地主義者であったが、大戦中の戦歴やティターンズの組織育成の手腕を見る限り、彼が実務レベルにおいて幅広い能力を有していたことは確かである。今日、彼に対して反動的な軍人独裁者という否定的評価が定着したのは、生前の彼が権力掌握の過程で見せた強引な手法と無関係ではあるまい。

■ジョン・クレスト【人名】

アフリカ戦線における伝説的なエース・パイロット。彼は、タンザニア地区・キリマンジャロ方面第18補給基地所属の2等整備兵であり、学徒動員令によって召集された当時16歳の少年兵であった。終戦直前の撤退作戦において、基地所属のパイロットが全員戦死してしまったため、整備兵である彼は、残ったモビルスーツを駆って単身アデンまで脱出。その後、再びタンザニア地区まで戻って基地の生存者を救出し、無事に宇宙へ帰還したという。この英雄のエピソードは、当時、アデン基地に集結した公国軍将兵の間で語り継がれたもの、いわば「戦場のフォークロア」でありその性質上、細かな点については幾つかのヴァリエーションが存在する。

ある資料によれば、ジョン・クレスト2等整備兵がアデン基地に到着したのは、連邦軍の掃討作戦が開始された当日、U.C. 0079年12月15日の日中である。彼が所属していた第18補給基地が壊滅したのは、同月12日早朝であり、この間は3日しかない。タンザニア地区のマンヤラ湖畔に位置する同基地からアデンまでは直線距離でも2000キロ前後あるが、僅か3日でこの行程を走破するのは、ホバー推進の陸戦艦なら可能でも、二足歩行型モビルスーツでは難しいだろう。ましてや彼は正規のモビルスーツ・パイロットではなく、アデンへの途上に待ち受ける連邦軍先発隊や地雷原を避けながらの行軍となる。こうした状況から、彼が使用したモビルスーツは、ホバー推進が可能なMS-09系の機体ではないかと推察されるが、それを確かめる術はない。

また、ジョン整備兵が単身アデンを目指す直

接の要因となった、第18補給基地破壊の状況にも謎が多い。基地を襲撃したのは連邦軍ではなく、味方である公国軍精鋭部隊「鉄の蠍」であったという。「鉄の蠍」は2週間前より行方不明となっていたが、この日、突然に姿を現し、数機のモビルスーツによって基地を徹底的に破壊している。これより後、数日間に渡って「鉄の蠍」は付近の友軍部隊を手当たり次第に攻撃しているが、最初に狙われたのが、この第18補給基地であった。当時の記録によれば同基地は、本国へ輸送される重要機密物資の経路地になっていたため、これを襲撃の原因と考える説が根強い。

ともかく細かな日時や、それに至った状況は別にして、ジョン・クエストなる少年整備兵が、掃討作戦直前のタンザニア地区より単身脱出し、アデン基地まで辿り着いたことは確かであろう。その際に公認6機というモビルスーツ撃破スコアを記録したのも、彼が実際に生還している以上、事実である可能性が高い。大戦末期の心身共に疲弊した公国軍将兵にとって、ジョン整備兵の成し遂げた脱出劇は快挙であり、彼を英雄として祭り上げたいという心理は理解できるものである。そして、その英雄化の過程において、ジョン整備兵が連邦軍の大部隊を撃破した、残された従軍看護婦を救出するために基地まで戻った、果ては裏切り者の「鉄の蠍」を倒した、といったエピソードが付け加えられ、虚像としてのジョン・クエスト像が作り上げられたのではないだろうか。

概して、戦時中の英雄とは、軍の広報部などによって作り上げられる場合が多く、誇張された戦果と、軍上層部にとって都合の良い機能的なコメントによって、将兵や国民の士気を高めるための存在であるといえる。ジョン・クエストが異彩を放っているのは、彼が、軍上層部によってではなく、前線の将兵によって広められた存在だからである。

■「スカラベ」【部隊名】

中東方面に派遣された公国軍部隊のひとつ。新機材の評価なども担当していたらしく、MS-09「ドム」のD型仕様の性能評価を行ったとされる。「スカラベ」部隊の主要装備はMS-06D「デザート・ザク」であり、評価試験時のデータ収集に用いる特殊な機材も保有していたという。本部隊は、リビア砂漠南部を主戦場に連邦軍に

対する抵抗を続けていたが、連邦側が大型陸戦艇を含む大規模な増援部隊を繰り出したため、戦力の再編を図り西方へ移動している。そして補給部隊との接触に成功した「スカラベ」は、評価対象機材であるドムを受領し、その後、約800キロを走破してティベスティ山地へ達したという記録が残されている。

■「スכולピオ」【部隊名】

中東西部を中心に遊撃戦を行った「スכולピオ」は、第5地上機動歩兵師団第2モビルスーツ大隊の所屬であり、隊長のカーミック・ロム大尉は、同師団第1モビルスーツ大隊のロイ・グリッドウッド少佐と同様に、サイド3・ムンゾ以外からの移民者である。第2次降下作戦に前後して中東方面に派遣された部隊には、「スכולピオ」や「カラカル」のように外国人義勇兵で編成された部隊が多いが、これは彼ら外国人部隊が、損耗を気にせず投入できる捨て駒として扱われたから、という説がある。その真偽はともかくとして、常に激戦区に投入された外国人部隊が、多くのエース・パイロットを輩出したのは事実である。

■ダカール【地名】

かつては「アフリカのバリ」と呼ばれた計画都市。連邦政府議会の所在地であり、宇宙世紀における政治の中心として極めて重要な戦略的意味を持つ。A.D.1857年、ベルデ岬とゴレ島に居住する自国商人を保護するために、フランスが建設した要塞がこの都市の起源であり、サン・ルイ（セネガル河口に建設されたフランス植民政策の拠点都市）との間に鉄道が開通したことで急速に都市化した。アフリカ大陸最西岸に位置し、ヨーロッパと南米を結ぶ中継地として、また落花生やアラビアゴムの輸出港として発展を遂げた港湾都市でもある。A.D.1902年以來、フランス領西アフリカ植民地の主都として非常に栄えるが、第2次世界大戦後の植民地の分離独立に伴い、セネガル共和国一國の首都となる。やがて、連邦政府が成立し、年次総会が開かれる議事堂がおかれるに至って、ダカールはかつて以上の政治的重要性を手に入れることとなった。

大戦中には、公国軍降下部隊の目標のひとつとなり、サハラ砂漠に展開した連邦アフリカ

面軍との間、第2次降下作戦の際、ニュー・ユニオン部隊機能はダカールにアフリカ人部隊も必死の防衛を企てた。動乱のあつた。撃によって、ハーモン軍に渡って軍事

■「鉄の蠍」

ギレン総帥にされた「鉄の蠍」を多数投入した。軍からは戦力に付けていた。モビルスーツは、他の地球にあった。例え「戦い」による然のザクを捕、あるいはいた。またリック・クエストMS-14C「ダカール」ことである。完成したのが機体であり、アサザ配下の合えられた。特権が理解されて「鉄の



作戦が大型機動
り出したため、
ている。そして
スカラベ」は、解
その後、約800
に達したとい

った「スコルビ
モビルスーツ
ミック・ロム大
大隊のロイ・グ
ド・ムンゾ以外
下作戦に前後し
には、「スコルビ
国人民義勇兵で編
成された外国人部隊
捨て駒として扱
その真偽はとも
された外国人部
を輩出したの

と呼ばれた計画
であり、宇宙世紀
重要な戦略的
レドムとゴレ島に
ために、フランス
起源であり、サ
されたフランス
この鉄道が開通した
アフリカ大陸最西岸
と結ぶ中継地として
5。A.D.1902年以
来地の主都として
大戦後の植民地の
和国一国の首都と
立し、年次総会が
至って、ダカール
を手に入れること

隊の目標のひとつ
た連邦アフリカ方

面軍との間に、激しい戦闘が行われた。公国軍
の第2次降下作戦、すなわち北米大陸侵襲に伴
い、ニューヨークにおかれていた連邦政府の本
部機能がダカールに移され、多数の政府高官も
アフリカ入りしていたことから、連邦軍として
も必死の防戦であった。その後、ティターンズ
動乱のあったU.C.0087年には、カラバの空挺戦
撃によって市街戦が行われ、翌U.C.0088年には
ハマーン軍の進駐を受けるなど、戦後も数度に
渡って軍事行動の標的となっている。

■「鉄の蠍」【部隊名】

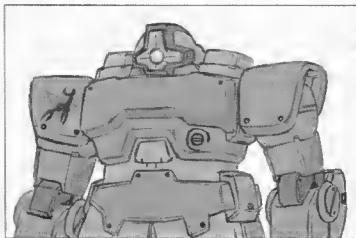
ギレン総帥の隷下部隊としてアフリカに派遣
された「鉄の蠍」は、優れた技量を持つパイロ
ットを多数揃えた有力部隊で、アフリカ戦線の友
軍からは戦線の火消し役として大きな期待を受
けていた。軍上層部との密接な関係から、新型
モビルスーツが優先的に配備された「鉄の蠍」
は、他の地球方面軍部隊とは一線を画す存在で
あった。例えば、U.C.0079年末の「北アフリ
カの戦い」において、大半の公国軍部隊は旧態依
然のザクを主力としていたが、「鉄の蠍」はグ
フ、あるいはドムへの機種転換をほぼ済ませ
ていた。また特筆すべきは、隊長であるフレデ
リック・クランベリー大佐のために、最新鋭の
MS-14C「ゲルググ・キャノン」が1機送られた
ことである。ゲルググ・キャノンは終戦までに
完成したのが僅か15機に留まったとされる貴重
な機体であり、その内、最低でも12機がキン
ア少将配下のエース部隊に配備されたことを考
え合わせれば、当時の「鉄の蠍」が有していた
特徴が理解できよう。

さて「鉄の蠍」は11月中旬より始まった連邦

軍の「ベルベット」作戦に対し、公国軍側の主
力として迎撃戦を展開することとなった。しか
し、同月26日の戦闘で公国軍が総崩れとなる
中、「鉄の蠍」は軍上層部との連絡を絶ち、隊長
以下部隊丸ごとが行方不明となってしまう。こ
れがU.C.0083年の旧公国軍残存シーマ海兵隊
によるデラズ艦隊突撃り護し事件、U.C.0088年
の「ジュビトリス」隊によるティターンズ戦艦「ド
ゴス・ギア」撃沈事件と並ぶ、宇宙世紀史上有
数の真切り事件の幕開けであった。

北アフリカの主戦場から姿を消した「鉄の蠍」
が再び確認されたのは2週間後の12月12日の
ことであった。突然、遙か南のタンザニア地区に
現れた「鉄の蠍」は、数機のモビルスーツをもっ
て味方の第18補給基地を攻撃、その後、北へ向
かって逃走したのである。当時、タンザニア地
区及び隣接するケニア地区、そのさらに北に位
置するエチオピア地区には、アデンを目指し退
却中の公国軍部隊が徘徊していたが、「鉄の蠍」
は、これら逃走中の友軍部隊を撃破しつつ北上、
そして、ルート上に位置する無人の要塞、グド
要塞に立て籠もった。「鉄の蠍」は第18補給基
地を襲撃した際、輸送中であつた重要機密物資
を奪得したといわれているが、真相は不明であ
る。ともかく「鉄の蠍」は一方的に公国軍の指
揮下から離れ、迫り来る連邦軍を前に戦線を放
棄し、あろうことか友軍部隊を次々に攻撃した。
総帥自慢の精鋭部隊が引き起こした前代未聞の
不祥事であった。

「鉄の蠍」隊長のクランベリー大佐の目的が何
であったのか、はっきりしたことは戦後も不明
なままである。なぜなら「鉄の蠍」に占拠され
た直後の同月15日、グド要塞で謎の大爆発が発



■「鉄の蠍」所属のMS-09B「ドム」。
右肩装甲前面には蠍をモチーフとした
部隊マーク（下）が描かれている。



生、「鉄の蠍」は隊長以下ほぼ全員が生き埋めとなつてしまったからである。この時、グド要塞の内部には連邦軍の先発隊が侵入していたらしいが、爆発に巻き込まれ壊滅してしまい、一体要塞内部で何が起きたのか、連邦軍側にも確かなことは分らずに終わった。クランベリー大佐と連邦軍側の裏取引の交渉が決裂し、内部で戦闘が発生した結果、弾薬類に引火し要塞が崩落したという説が有力だが、「鉄の蠍」が裏を張って連邦軍部隊を誘き寄せ、全滅覚悟で自ら要塞を爆破したという新説もあり、エリート軍人であった大佐の評価は定まっていな。

■トゥアレグ族【部族名】

トゥアレグ族とはサハラ砂漠の先住民であり、かつては駱駝の遊牧や交易を産業として栄えた部族である。アラブ人の侵入以前よりこの地を支配した彼らは、いわゆる「ベルベル」と呼ばれるグループに属する。「ベルベル」は古代ローマ人が北アフリカの住民を指し「バルバルス(Barbarus)」、すなわち異邦人と呼んだのが語源といわれ、その長い歴史の中でアラブ人との混血が進んだため、現在では言語も身体的特徴も異なる複数の集団に分裂している。トゥアレグの人々は、そのベルベル系先住民の流れを汲み、誇り高い民族である。

トゥアレグ族の社会は伝統的な階層社会であり、イムシャールと呼ばれる貴族、従民たるイムラト、聖職者であるイネスレメン(あるいはマラブート)に区分されていた。この他に農業や手工業に従事する階級、イランが存在するが、彼らはいくつかの奴隷階級であり、人種的にはニグロイドである(一般的なトゥアレグは先住コーカソイドを起源とする混血種で褐色の肌を持つ)。またトゥアレグ族は7つの部族集団に分かれ、それぞれの部族集団は首長によって統治される。アフリカ社会の変化に伴い、トゥアレグ族の伝統は徐々に失われ、干渉や戦乱の中で多くの部族民が難民化したことにより、彼らの社会もまた確実に変質していったが、宇宙移民時代に入ってもなお、トゥアレグ族は独自の文化と強い民族的意識を保ち続けたのである。

宇宙移民が開始された後、アフリカ大陸の各地で反連邦組織が結成され、それはFLNを中心とする大きな運動へと発展していったが、トゥアレグ族もまたこの流れに関わっていくこと

なる。トゥアレグ族の部族民によって構成された武装組織、「青の部隊(Team Blue)」は他の反連邦組織と一線を画し、独自の行動理念によって活動した。彼らは、同族のみでメンバーを編成する少数精鋭主義を採用し、極めて統率の取れた強固なグリラ部隊を作り上げた。「青の部隊」とは、彼らが藍色の木綿服を身につけることから付けられた名だが、これは元々、トゥアレグ族の貴族階級イムシャールが身に纏った藍染めのベールに由来するという(余談だが、従民階級イムラトは白いベールを着用する)。連邦軍やOAS相手に激しい戦闘を繰り広げた「青の部隊」は、大戦によってアフリカに進駐した公国軍部隊とも時には戦火を交え、捕獲したモビルスーツを自陣営の戦力に加えるなど勢力を拡大。大戦後の「青の部隊」は、部族の戦士にパイロット教育を施し、旧公国軍機を中心としたモビルスーツ部隊を編成・保有するに至った。より苛烈な武力闘争路線を選択した彼らは、U.C.0088年のハマーン軍アフリカ派兵に際しては、ダカールを制圧したハマーン・カーンと共闘関係を結び、ハマーン軍から新型武器の供与を受けているが、闘争方針を巡る対立から他のFLN実戦部隊と武力衝突するなど、あくまで独自路線に拘りを見せている。

■ノイエ・ビッター【人名】

東アフリカ方面第3突撃機動師団司令で最終階級は少将。ヨーロッパと北アフリカの各地を転戦した後、残存部隊を率いてタンザニア地区へ移動。ダイヤモンドの露天掘り鉱山跡を利用したアジト、通称キンバーライト鉱山基地を拠点として、終戦後3年間に渡って抵抗を続けたことで知られる。少将は、優秀なモビルスーツ・パイロットでもあり、愛機MS-06S「ザクII」の胸部には、無数の小さな星が描かれていたという。U.C.0083年10月23日、旧公国軍残党デラーズ派の「星の肩」作戦に呼応し、連邦宇宙軍強襲揚陸艦「アルビオン」所属のモビルスーツ隊と交戦、壮絶な最後を遂げる。

■「ピンクバンサー」【部隊名】

最も初期にMS-09D「デザート・ザク」を受領した部隊のひとつである「ピンク・バンサー」は、保有モビルスーツに独特のデザートピンク塗装を施したことで有名である。本部隊は開戦

劈頭の侵攻作戦に参加、ジャブローに一時のしこり、公国軍の兵士となつた。

■「ミッドナイ
突撃機動
ザクの構想に
元々、グラ
ツ、パイロ
た、大規模
軍ニューギ
発に巻き込
よって視力
しての道を
することな
ル」は小隊
型機材の審
は困難な特
チームとい
自らの提言
線に復帰。さ
「ミッドナイ
基地潰しや通
事している
カリフォル
「ミッドナイ
まり、貴重な
末期には潜水
マ・クベ大佐
いる。オデッ
一翼を担い
軍として防衛
彼らが、最後
現したのは、
手に落ちた終
連邦軍の再占
が、ドム1機、
れ、停泊中の
被っているが
な戦術から「
ないかと考え

によって構成され
ue)は他の反
行動理念によ
メンバーを編
重めて統率の取
た。「青の部
を身につけるこ
は元々、トゥア
が身に纏った藍
余蔵だが、従
を着用する)。運
乗り広げた「青
リカに進駐した
え、捕獲したモ
えるなど勢力を
部隊の戦士に
軍機を中心とし
育するに至った。
扱した彼らは、
カ派兵に際して
ン・カーンと共
新型武器の供与
対立から他の
ど、あくまで独

師団司令で最終
フリカの各地を
タンザニア地区
り鉱山跡を利用
り鉱山基地を拠
て抵抗を続けた
なモビルスーツ・
D6S「ザクⅡ」の
扱われていたとい
国軍残党デラー
、連邦宇宙軍強
モビルスーツ隊

「ザク」を受領
ンク・パンサー」
デザートピンク
。本部隊は開戦

勢頭の侵攻作戦において、サハラ砂漠における戦闘に参加、その後、具体的な経緯は不明ながらジブラルタル海峡の確保に貢献したという。一時的にしるジブラルタル海峡を手中に収めたことは、公国軍のヨーロッパ進出にとって大きなはずみとなったが、急速な戦線拡大によって公国軍の兵站機構は多大な負担を強いられることとなった。

■「ミッドナイト・フェニル」【部隊名】

突撃機動軍少佐であるグラート・シュマイザーの構想に基づいて編成された実験特殊部隊。元々、グラート少佐はベテランのモビルスーツ・パイロットであり、開戦当時も現役であったが、大規模降下作戦に先立って行われた連邦軍ニューギニア防空基地攻防戦で、敵砲台の爆発に巻き込まれ負傷。結局、この時の戦傷によって視力障害を負った少佐は、パイロットとしての道を断念し、指揮官としての任務に専念することとなった。「ミッドナイト・フェニル」は小隊規模のモビルスーツ部隊であり、新型機材の審査が主任務であったが、正規部隊では困難な特殊任務を遂行するゲリラ戦の専門チームという性格も持ち合わせていた。少佐は自らの提言によって新設された部隊を率いて前線に復帰。さっそく第2次降下作戦に参加した「ミッドナイト・フェニル」は、連邦軍の防空基地潰しや通信網の寸断などといった任務に従事している。

カリフォルニア基地攻略作戦に参加した後、「ミッドナイト・フェニル」は、北米戦線に留まり、貴重な遊撃戦力として活躍するが、大戦末期には潜水艦によってユーラシア大陸へ移動、マ・クベ大佐の要請に従いゴビ砂漠へ進出している。オデッサ戦後にはジャブロー攻略作戦の一翼を担い、その後、再び北米戦線に復帰し敵軍として防衛戦に従事。正に世界中を転戦した彼らが、最後の戦場となるアフリカ戦線に姿を現したのは、既に北アフリカの大半が連邦軍の手に落ちた終戦間際のことであった。この時期、連邦軍の再占領下にあったアレキサンドリア港が、ドム1機、ザク2機の小戦力によって襲撃され、停泊中の輸送艦多数と港湾施設が大損害を被っているが、この時の奇襲部隊はその特徴的な戦術から「ミッドナイト・フェニル」ではないかと考えられている。



■「ミッドナイト・フェニル」の女性パイロット、ソフィ・フラン少尉。乗機はMS-06J、MS-09BもしくはF。オデッサ戦後の入隊ながら、編隊指揮をしばしば任せられる程、グラート少佐の信任を受けていたという。

■ロイ・グリーンウッド【人名】

アフリカ戦線における活躍で知られるロイ・グリーンウッド少佐は、卓抜した野戦指揮官として非常に名高い人物である。U.C.0045年、ドイツ系移民の子としてムーアに生まれた彼は、地元の連邦総合大学ムーア分校を卒業した俊英であり、結婚して二児を設けるなど順風満帆の人生を歩んでいた。しかし、U.C.0078年、不幸な宇宙船事故によって愛妻ケーティを失うと、彼は失意の内にムンゾへ移住。そして開戦を1年後に控えた公国軍による志願兵募集に応じ、いわゆる外国人義勇兵として入隊を果たした。

モビルスーツ・パイロットの養成過程を短期間で終了した彼は、突撃機動軍第1機動歩兵師団所属となり、U.C.0079年1月の開戦を迎える。他の外国人義勇兵と同様、彼もまた早々と最前線に投入され、ブリティッシュ作戦において左目を負傷、失明こそ免れたものの、以降は眼帯を着用するようになる。この時の戦傷のため、ルウム戦役には不参加となるが、第2次降下作戦においては早くも前線復帰を果たし、地球方面軍第5地上機動師団所属の少佐として紅海に降り立つ。この時点で指揮官として頭角を現しつつあった彼は、第5地上機動歩兵師団第1モビ



ルース大隊の将兵を率いて各地を転戦。特に、彼が自ら率いたA小隊「カラカル」と、麾下の特殊部隊G-27は目覚ましい戦果を挙げている。また、最近の研究に拠れば、連邦軍有数の宇宙港、パイコヌールの攻略戦にも、グリーンウッド隊が投入されたともいう。

この後、彼は「カラカル」小隊を率いて北アフリカ戦線へ向かっているが、その時期については8月以前ともオデッサ戦後ともいわれ、定かではない。彼の部隊は北アフリカ最大の公国軍拠点アレキサンドリア基地へと移動し、ここでMS-06D「デザート・ザク」を受領。そして、南西部より進撃してきた連邦軍部隊を阻止すべく、空挺作戦を執行している。連邦軍側の記録と照らし合わせると、連邦軍による「パトリオット」作戦を挫折させたのが、この空挺作戦ではないかと思われるが、「カラカル」小隊南下の時期がオデッサ戦後とされているため、このあたりは微妙である。

連邦軍アフリカ方面軍が大攻勢を開始し、多くの公国軍部隊が南へ敗走、キリマンジャロやアデンを目指したのに対し、「カラカル」は終戦直前まで北アフリカに留まり、少佐自身もアレキサンドリア基地で終戦を迎えている。

■レアメタル【用語】

宇宙への進出を果たした人類は、アステロイド・ベルトの小惑星から鉱物資源を入手することに成功していた。小惑星の鉱物資源は人類に大きな恩恵を与えてくれたが、人類社会の需要を全て満たすまでには至らなかった。なぜなら、小惑星から産出される資源の種類には限りがあり、また、小惑星の鉱脈に含まれていたとしても、それが現実的なコストで採掘・生産可能かどうかは別問題であったからである。結論として、過半数がスペースノイドとなった人類にとっても、地球上の鉱物資源はまだまだ必要な存在であった。

アフリカ大陸は旧世紀時代より“資源の宝庫”と呼ばれ、かつてはこの地下資源を狙った先進諸国による植民地支配が行われた。しかし、鉱物資源の埋蔵量自体は他地域に比べそれほど多くはなく、大戦中の公国軍が重要視していたのは、アフリカよりむしろ中央アジアのオデッサ鉱山地帯であった。

にも関わらず、ギレン総帥が貴重な部隊を抽出してアフリカへ派遣したのは、この大陸がレアメタル（希少金属）を産出するからである。かつての米ソ冷戦時代、アフリカ大陸南部から産出されるパラジウム、クロム、バナジウム、マンガン、コバルトといったレアメタルは工業化を推し進める両陣営から注目を浴び、特に、自国内においてこれらの鉱物を採掘できない西側諸国にとって、アフリカ産のレアメタルは必要不可欠な存在であった。宇宙世紀においても、産出される鉱物の種類に多少の変化こそあれ、レアメタル産地としてのアフリカ大陸の重要性には変わりはなく、大戦中の両軍は、大陸南部を中心に点在する主要鉱山を巡り、激しく争った。最終的に、公国軍は、数ヶ月のアフリカ占領期間中に一定量のレアメタル類を入手、本国へ後送することに成功したが、軍上層部が最終防衛ライン上での決戦主義に傾いたため、大半のレアメタル鉱山群は放棄され、駐留部隊は宇宙へ撤退している。

は、アステロイ
等を入手するこ
物資源は人類に
人類社会の需要
った。なぜなら、
類には限りがあ
れていたとして
産・生産可能か
ある。結論とし
となった人類に
まだまだ必要な

り“資源の宝庫”
源を狙った先進
た。しかし、鉾
比べさほど多く
現していたのは、
のオデッサ鉾山

貴重な部隊を抽
この大陸がレ
からである。か
大陸南部から産
バナジウム、マ
メタルは工業化
浴び、特に、自
密できない西側
アメタルは必要
世紀においても、
変化こそあれ、
カ大陸の重要性
軍は、大陸南部
り、激しく争っ
月のアフリカ占
領を入手、本国
軍上層部が最終
いたため、大半
、駐留部隊は宇

Appendices

Source list

Man & MobileSuit #01'



「MR75 ガンナー・ビーグル」

『灼熱の追撃』より。同作品とそれに続く一連のゲームブックには、ケイブンシャ版とバンダイの文庫版が存在する。内容はほぼ同一ながら、いやらしいことに挿絵が全く異なるため、可能な限り、双方を入手するのが好ましい。ちなみに、今回のイラストは、前者を参考にリファインしている。



「空挺作戦」

本文の戦史部分でも多めに参考にした『一年戦争史』の挿絵より再現。下から見上げた構図であるため、通常のガンタンクとの違いが殆ど分らないが、実際は、上半身のデザインが大幅に異なる。『第08MS小隊』版とも異なるため、要チェックである。



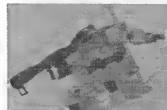
「銀狐のハルトマン」

『灼熱の追撃』に搭乗するエース“銀狐”ハルトマン乗機。同作品は、ハルトマンを始め、多くのオリジナル・キャラクターが登場するため、数少ないアフリカ戦線ネタとして貴重な存在である。誤植スレスレの妙な型式番号も見逃せない。こちらもケイブンシャ版がベース。



「ザク・タンカー」

『GUNDAM GAMES』掲載のイラストより。TVシリーズを見る限りでは、ジオン大戦時に活躍していたのかどうか確証が持てないザク・タンカーではあるが、同書によって、公国軍時代の運用例が確認できる。他にも、個性豊かなマゼラ・アタック派生型のイラストは必見。



「つ〜きの〜さば〜くを〜つとくろあ」

一体何のことやらと思われるであろうが、SDガンダムのシールである。その昔、ガチャガチャの塩ビ人形を買った、金や銀の小さなシールがオマケとして付いてきたのを思い出してほしい。そんなシールの1枚「MSV-46 熱帯戦用ドム量産型」は、B型ベースのD型の外観を示すほぼ唯一の資料として、ごく一部で珍重されているのだ。

ブックには、ケイ
同一ながら、い
方を入手するのが
コジファインしてい

の挿絵より再現。
の違いが殆ど分か
『第08MS小隊』

機。同作品は、
登場するため、数
度スレスレの妙な型
ス。

ズを見る限りでは、
いざク・タンカーで
認できる。他にも、

らあ

のシールである。そ
小さなシールがオマ
ールの1枚「MSV-
の外観を示すほぼ唯



「鉄肩」

こちらも『灼熱の追撃』の挿絵より。同作品は、ギャロップやミデアのみならず、コミュやマンガースまで出てくる脇役メカの宝庫であり、サムソンもやられ役として堂々の登場である。砂漠に残骸を晒す姿が印象的。



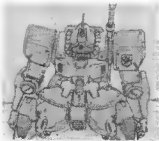
「RGC-80 ジム・キャノン」

『戦略戦術大図鑑』の挿絵より。元祖MSV時代より、アフリカ戦線にジム・キャノンが投入されたとする資料は、数多く存在するが、ジオン大戦時の同型がジムIIのビーム・ライフルを持っているイラストは、恐らくこれのみである。



「エリミア」

『灼熱の追撃』において重要な役割を果たすキャラクター。公国軍によって見捨てられた現地人スパイといった役どころである。ケイブンシャ版を参考にしているが、似ていないので注意！！



「MS-09D トロピカル・ドム」

『灼熱の追撃』ケイブンシャ版の味わいある挿絵より。元イラストの機体には、YMS-09 ベースであることを示す多くの特徴が見て取れる。デザインは、MSVの設定画に近づけているが、左肩アーマーのマーキングは、元イラストより忠実に再現している。



「RMV-1 ガン・タンクII」

『灼熱の追撃』ばかりで申しわけないが、これも同作品の挿絵より。左腕ユニットが、TVシリーズ登場のRX-75のそれと同一である点に注目したい。恐らく、公国軍のMSM-07同様、胸部ユニットごとの交換が可能であったのだろう。

○プラスチックモデル解説書

- 1/144 『RGC-80 ジム・キャノン』解説書
1/144 『RGC-80 ジム・キャノン』解説書 (機動戦士Zガンダムパッケージ版)
1/144 『MS-06D デザート・ザク』解説書
1/144 『MS-06D デザート・ザク』解説書
1/144 『YMS-09 トロピカルテストタイプ・ドム』解説書
1/144 『MS-09G/H ドワッジ』解説書

○小説

- 『機動戦士Zガンダム 第一部カミーユ・ビダン』著/富野由悠季 (角川文庫 1987)
『機動戦士Zガンダム 第三部強化人間』著/富野由悠季 (角川文庫 1987)
『機動戦士Zガンダム 第四部ザビ家再臨』著/富野由悠季 (角川文庫 1987)
『機動戦士ガンダム 0083 (上)』著/山口宏 監修/今西隆志 (角川文庫 1992)
『機動戦士ガンダム 0083 (中)』著/山口宏 監修/今西隆志 (角川文庫 1992)
『機動戦士ガンダム 0083 (下)』著/山口宏 監修/今西隆志 (角川文庫 1992)
『機動戦士ガンダム外伝 コロニーの落ちた地で… (下)』著/林譲治 (角川スニーカー文庫 2000)
『ZEONIC FRONT 機動戦士ガンダム 0079 ①』著/林譲治 (角川スニーカー文庫 2001)
『ZEONIC FRONT 機動戦士ガンダム 0079 ②』著/林譲治 (角川スニーカー文庫 2001)

○コミック

- 『ガンダムパイロット列伝 蒼穹の勇者達』著/沖一 (ソニー・マガジンス 2001)

○同人誌

- 『ギレンの野望 土器手司 スタジオじばんぐ作業集』(スタジオじばんぐ 1998)
『ギレンの野望 ジオンの系譜 アニメーション作業集』(スタジオじばんぐ 1999)
『GUNDAM MILLENNIUM VoI. 1』(GUNDAM MILLENNIUM 1998)
『GUNDAM MILLENNIUM VoI. 2』(GUNDAM MILLENNIUM 1999)
『GUNDAM MILLENNIUM VoI. 3』(GUNDAM MILLENNIUM 1999)
『GUNDAM MILLENNIUM VoI. 4』(GUNDAM MILLENNIUM 2000)
『GUNDAM MILLENNIUM VoI. 5』(GUNDAM MILLENNIUM 2000)
『GUNDAM MILLENNIUM VoI. 6』(GUNDAM MILLENNIUM 2001)

○その他

- 『機動戦士ガンダム 灼熱の追撃-アフリカ戦線 0079-』構成・文/山口宏 (勁文社 1986)
『TACTICS 別冊 PERFECT MANUAL SERIES:1 GUNDAM GAMES』(ホビージャパン 1988)
『SD クラブ スペシャル ジ・アート・オブ SDガンダム』(バンダイ 1989)
『アフリカを知る事典』(平凡社 1989)
『M.S.ERA』(バンダイ 1990)
『世界軍事略語辞典』(国書刊行会 1991)
『覇王ゲームスペシャル 22 機動戦士ガンダム CROSS DIMENSION 0079』(講談社 1995)
『フランス解放戦争史 第二次大戦~植民地戦争~現代』(原書房 1995)
『電撃攻略王 機動戦士ガンダム CROSS DIMENSION 0079』(メディアワークス/主婦の友社 1995)
『ガンダムショップVOL.1』(バンダイ 1996)
『機動戦士ガンダム ジオン軍ミラリールファイル』(バンダイ・デジタルエンタテインメント 1997)

本書は、2002 年 12 月 30 日に発行した「Man & MobileSuit #01」を
一部増補改定したものです。

～奥付～

Man & MobileSuit #01'
The battle of Africa 0079

企画・編集 Man & MobileSuit

発行者 織田万里

連絡先 〒362-0035

埼玉県上尾市仲町2-6-17

初版発行日 2001 年 12 月 30 日

第2版発行日 2002 年 12 月 28 日

印刷 (株) ポプルス

※本書掲載の全ての文章および画稿の

無断複写・複製・転載を禁ずる

※本書の画稿は全て織田万里による

著者運営 Web サイト

Zaku Page

<http://members.jcom.home.ne.jp/zakupage/>

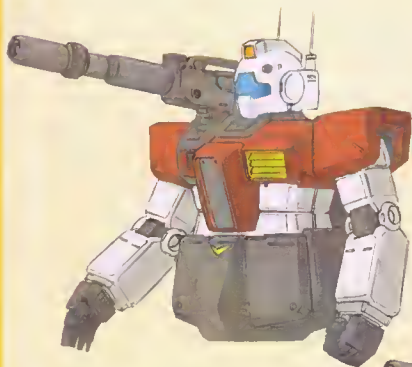
ご意見・ご感想はこちらまで

e-mail

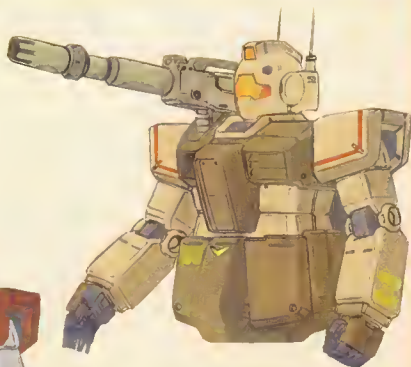
walfisch@jcom.home.ne.jp

RGC-80 Color variation

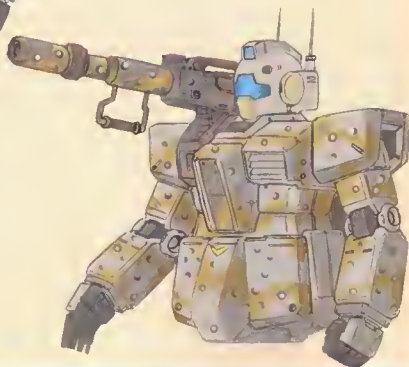
North Africa 0079



1



2



3